

千葉県八千代市

内野南遺跡 d 地点発掘調査報告書

－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査－

2008

齋藤 信孝

八千代市教育委員会

千葉県八千代市

内野南遺跡 d 地点発掘調査報告書

－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査－



2008

斎藤 信孝

八千代市教育委員会

序 文

八千代市は、「住宅団地発祥の地」として知られておりまして、昭和30年代における八千代台の町づくりを契機として住宅団地の造成が進み、首都30km圏に位置する住宅都市として成長を続けてまいりました。

昭和60年代以降、市域北部における大学と住宅地のセット開発が行われ、文教都市としての側面も併せ持つようになっていきます。

また、京成電鉄に加えて平成8年4月には東葉高速鉄道が開業したことで、都心へのアクセスもさらに便利となりました。そして、沿線を中心とした新しいまちづくりが進み、ことに緑ヶ丘駅周辺は、今や八千代市の顔であると申し上げましても、過言ではありません。

このように、わが市は県内の中堅都市として、現在も発展し続けております。

このような状況のもと、八千代市教育委員会では、市内で行われる個人や民間企業の開発行為、土地区画整理事業などに先行する埋蔵文化財発掘調査に従事してまいりました。

本報告書に掲載した調査は、市域の西部に当たる、吉橋地区において計画された、集合住宅建設に先立つものです。この事業地につきましては、平成19年度に埋蔵文化財についての照会があり、八千代市教育委員会が本調査を実施してまいりました。

八千代市西部は、縄文時代の遺跡が濃密に分布しているエリアで、東葉高速鉄道の敷設に先立つ調査におきましては、かなりの成果が上がっております。

内野南遺跡は、今回報告するd地点をはじめ、a地点からc地点に亘る発掘調査が行われ、縄文時代を主に豊富な内容を持ち、当地域を代表する遺跡であることが判明いたしました。中でもd地点における、縄文時代早期～前期の集落および当時のムラ道の検出は、特筆されるべきものです。

今回の調査により、八千代市域における縄文時代の遺跡のあり方、あるいはその歴史的な背景を語るためには、欠くことのできない基礎資料を得ることができました。

本報告書が学術資料としてはもとより、教育資料として、郷土の歴史に興味をお持ちの皆様は大いに活用されれば幸いです。また、このことにより、地域の文化財保護についての関心を高めることとなりますことを願ってやみません。

最後になりましたが、調査の実施にあたり多大なご協力をいただいた事業者の皆様を初め、調査から整理までに種々ご指導をいただいた皆様に深く感謝いたします。

また、調査や整理に従事された調査員、補助員の方々にも深く御礼申し上げます。

平成20年3月31日

八千代市教育委員会

教育長 萩原康正

凡 例

1. 本書は、千葉県八千代市吉橋に所在するに内野南遺跡の、平成19年度に実施された発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、集合住宅建設に先立つもので、地権者である斎藤信孝氏の委託を受け、八千代市教育委員会が実施した。
3. 調査及び整理は以下のように実施した。
調査期間 平成19年11月26日～平成20年1月18日（本調査）
調査面積 1,600㎡
整理期間 平成20年2月2日～平成20年3月31日（本整理）
4. 本調査及び本整理については中野修秀が担当した。
5. 本書の図版作成は、中野修秀、原田雪子、桂田 肇、見神光恵が行った。編集・執筆は中野が担当した。ただし、第1章第1節は森 竜哉が執筆した。
6. 出土した遺物・写真・図面等の調査資料は、八千代市教育委員会が保管している。
7. 挿図の第1図の地形図は、八千代市発行の25,000分の1八千代市都市計画基本図を使用した。
8. 挿図の第2図の地形図は、八千代市発行の2,500分の1八千代市都市計画基本図を使用した。
9. 遺構Noは、調査順の数字で表記した。遺構の内容や時期が異なる場合も、調査時点のNoを使用している。
10. 各実測図の縮尺については、原則として下記のとおりである。これ以外は、適宜挿図中に示した。
竪穴住居跡 1／80 炉穴・陥穴及び土坑 1／40
11. 遺物実測図中のスクリーンパターンは、特に指摘が無い場合は、以下のとおりである。

 繊維土器  磨れ面  敲打痕

12. 「おとしあな」は、「陥穴」と表記することにし、「落とし穴」の用語は用いなかった。
13. 「道路状遺構」は、「MM」と呼称した。これは、「村道（むらみち）」にちなんだものである。必ずしも適切な用語ではないが、漢字の「道路（どうろ）」のローマ字表記の頭文字である「D」は竪穴住居跡、同じく「道（みち）」の「M」は溝、英単語の「ROAD（ロード）」の「R」は炉跡の呼称として、既に使用されていることによる。そこで、「村道」を「村」と「道」の二つに分け、各々の頭文字の「M」を重ねることで一つの用語にする、という方法を採用した。
14. 発掘調査から整理作業の間において、以下の諸氏・諸機関にご指導・ご協力をいただきました。記して感謝いたします。

千葉県教育庁文化財課 常松成人 宮澤久史 玉井庸弘 植田正子 長田京子

目 次

序 文

凡 例

目 次

第1章 調査経過及び概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第3節 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境	3
第4節 内野南遺跡の調査履歴	4
第2章 検出された遺構と遺物	7
第1節 縄文時代	7
(1) 竪穴住居跡	7
(2) 炉穴	15
(3) 陥穴	15
(4) ピット・土坑	17
(5) 道路状遺構	47
(6) ピット出土遺物	49
(7) 調査区出土遺物	51
第3章 成果と課題	52
第1節 遺構の垂直分布状況から見た土地利用	52
第2節 縄文早期後半の集落	52
第3節 縄文前期前半の集落	52
第4節 縄文前期後半の集落	52
報告書抄録及び概要	53

第1章 調査経過及び概要

1. 調査に至る経緯

平成19年4月3日、八千代市吉橋字内野1058番1の土地について齊藤信氏（以下、「事業者」という）からマンション計画に伴い、「埋蔵文化財の取扱いについて」の確認依頼文書が八千代市教育委員会（以下、「市教委」と略）に提出された。確認地は市遺跡No.289内野南遺跡の範囲内であり、南隣接地の発掘調査において縄文時代早期・後期の炉穴・土坑、奈良時代の竪穴住居跡が検出されており、当該地に遺跡が広がる可能性が高いと判断された。遺跡が所在する旨回答した。その後、取扱いにかかる協議を行った結果、事業者が当初の計画を進めたい旨を確認し、発掘調査を予定することとなった。平成19年5月、文化財保護法第93条第1項の規定による土木工事の発掘届が提出され、同年7月確認調査に着手した。

確認調査は、市教委が平成19年度市内遺跡発掘調査事業として、国庫・県費補助金を受けて実施した。その結果、縄文時代前期竪穴住居跡1軒、早期炉穴1基、早期から前期土坑17基を検出した。この結果を踏まえ、1,600㎡について本調査が必要な旨事業者に送付した。

その後、事業者と市教委との協議により、工事による掘削が本調査範囲に及ぶため現状保存は困難と判断されたため、記録保存の措置として本調査を実施することとなった。調査は八千代市、市教委、事業者の三者による協定後、市教委による直営事業として実施することとなった。八千代市と事業者による委託契約が締結され、諸準備が整った平成19年11月、調査に着手した。

2. 調査の方法と経過

調査は、確認調査において遺構を検出した部分と、その周囲を拡張する形で行った。

これらの各調査区に対して、1区～6区と呼称した。これ以後の調査区一括遺物の取り上げも、この呼称を用いている。

表土除去は重機を用い、周辺住民からの騒音などに対するクレームに対応し、ミニユンボを使用した。

a 地点の調査結果などにより、遺物包含層が存在することは確認視されてはいたが、発掘調査工程の迅速化を最優先課題としたため、遺構確認面は原則としてソフトローム上面である。

表土除去後に人力による遺構確認作業を行った。この後全ての遺構の精査及び掘り下げは、人力で行ったものである。

作業の迅速化のため、基本的に遺構の土層断面図は作成せず、エレベーション図は現地でのレベルリングに基づき、室内作業にて作成した。遺構平面図の作成に関しては、遺構の周囲に五寸釘と水糸を用いて、1m×1mの方眼（メッシュ）を張り巡らし、支距法を用いた。

遺物の取り上げは、方眼による支距法でドットを落とし、レベルで標高を計測した。

検出遺構などの写真撮影は、モノクロフィルム・カラー・リバーサルフィルムともに、35mmを使用している。

平成19年11月30日より、バックホーによる表土除去を開始した。12月22日バックホー搬出。

同年12月10日より機材を搬入する。時同じくして調査補助員を投入し、遺構確認作業を着手する。

同年12月12日より遺構調査を開始する。この後、順次各調査区にて諸作業を行った。

平成20年1月18日に現地調査を終了し、1月21日機材などの搬出を完了する。



第1図 周辺の縄文時代の遺跡 (S = 1 : 25000)

- | | | | | |
|-------------|-----------|------------|-----------|------------|
| 1 内野南遺跡 | 11 吉橋芝山遺跡 | 21 ラサル山遺跡 | 31 西芝山南遺跡 | 41 追分遺跡 |
| 2 仲ノ台遺跡 | 12 平作遺跡 | 22 ラサル山南遺跡 | 32 八王子台遺跡 | 42 本郷台遺跡 |
| 3 ライノ作遺跡 | 13 勘子山遺跡 | 23 向山遺跡 | 33 川向遺跡 | 43 サゴテ遺跡 |
| 4 ライノ作南遺跡 | 14 麦丸宮前遺跡 | 24 長兵衛野南遺跡 | 34 大東台遺跡 | 44 爪作遺跡 |
| 5 大和田新田芝山遺跡 | 15 水神遺跡 | 25 吉野郡幾遺跡 | 35 桑納遺跡 | 45 金堀台貝塚遺跡 |
| 6 妙見前遺跡 | 16 新田遺跡 | 26 吉橋新山遺跡 | 36 桑納前畑遺跡 | 46 高津新山遺跡 |
| 7 渋内遺跡 | 17 新田西遺跡 | 27 背戸遺跡 | 37 東帰久保遺跡 | ★は桑納川低地遺跡群 |
| 8 八幡前遺跡 | 18 新田台遺跡 | 28 大作遺跡 | 38 実高入遺跡 | |
| 9 西内野遺跡 | 19 麦丸台遺跡 | 29 東向遺跡 | 39 鶴作台遺跡 | |
| 10 西内野南遺跡 | 20 米本道南遺跡 | 30 西芝山遺跡 | 40 鶴作台西遺跡 | |

3. 周辺の地理的・歴史的環境

周辺の歴史的環境に関しては、「西内野遺跡発掘調査報告書」などで記述されている（森・中野2007）ため、詳細はそちらを参照されたい。内容的には、不可避な箇所のみ、西内野遺跡報文と重複する部分がある。再度記述したことに関しては、御寛恕を乞いたい。

内野南遺跡は、巨視的に見れば新川（平戸川）と桑納川の分水嶺に相当する、標高約26m前後の台地（仮称 麦丸台）に位置する。

この麦丸台は、西端は坪井川谷まで、南端は高津川谷までである。やや微視的に見た場合、桑納川谷と新川谷へ向かう形で開析谷が発達しており、幾つかの舌状台地（支台）が形成された。

その内の一つ、先端に吉橋城跡をのせる支台（仮称 吉橋支台）基部に、本遺跡は遺されている。

吉橋支台は、西側は石神川谷、東は花輪谷津（花輪川谷）によって開析された、半島状の舌状台地で、字名もさることながら、広大な面積を有する吉橋城跡から仮に命名した。台地の約半分程が既に工業団地化していて、元地形はわかりにくい、花輪谷津側は小支谷の開析が発達していたようである。

支台上に所在する遺跡を、既報告から見て行くと、妙見前遺跡で、縄文前期前半黒浜式・中期阿玉台式・加曾利E式、後期安行式などが確認されている。渋内遺跡では、縄文早期・後期土器が出土した。西内野遺跡では、陥穴群と土坑群が検出され、阿玉台式土器を中心に、田戸下層式・浮島式・興津式・五領ヶ台式・安行1式・晩期安行式土器などが出土した。

石神川谷の西側には、寺台支台・高本支台と仮に命名した、舌状台地が広がり、花輪谷津（花輪川谷）の東側には、尾崎館跡の名を冠した支台（仮称 尾崎支台）が広がっている。

尾崎支台では、東葉高速鉄道敷設に先立つ調査などで、多くの事実が判明した。

ライノ作遺跡・ライノ作南遺跡・仲ノ台遺跡及び大和田新田芝山遺跡では、縄文前期前半黒浜式期から集落が営まれており、遺跡群から見た、当該期における人口動態の推移が分かってきた。この遺跡群は、集落が営まれる前段階では、陥穴群に見られるような、狩猟域になっていた点でも共通点がある。

そして、微地形的に見ると、仲ノ台遺跡をのせる台地自体が、半島状の一つの小支台をなしており（仮称 仲ノ台小支台）、花輪谷津の谷奥であるだけでなく、尾崎支台と吉橋支台とを分けている。

仲ノ台遺跡と本遺跡は、まさに「指呼の間」にあり、谷向かいの位置関係にある。同様にして、本遺跡と花輪谷津をはさみ、谷向かいの位置関係にあるのが、大和田新田芝山遺跡である。先述のライノ作遺跡・ライノ作南遺跡を含めた場合、ほぼ径500m圏内に収まる程に近接している。

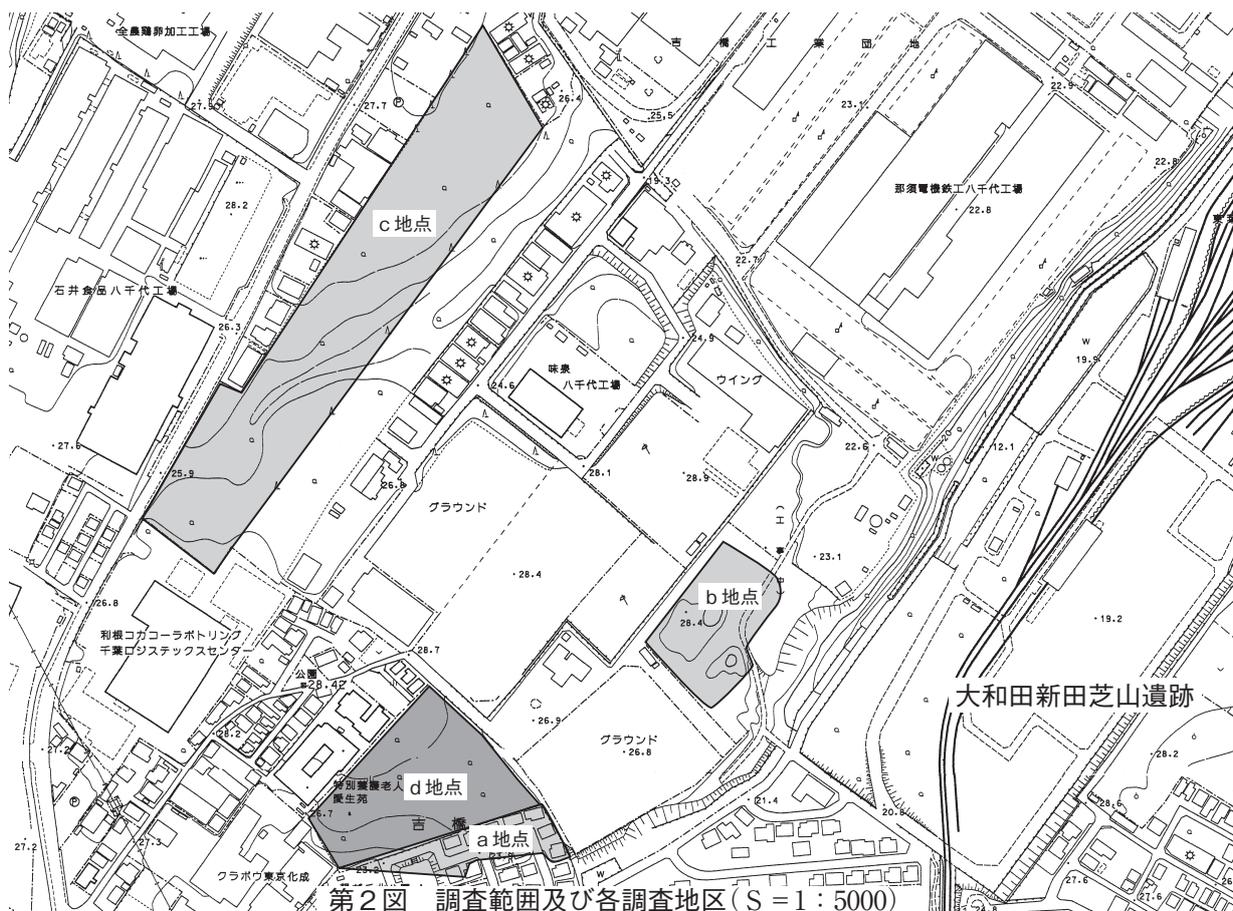
支台自体の中央部から先端にかけては、吉橋芝山遺跡・平作遺跡・勘子山遺跡が分布し、縄文中期後半加曾利E式から後期中葉加曾利B式と遺跡地名表に記載されている。ちなみに、大和田新田芝山遺跡では、後期中葉加曾利B3式期の竪穴住居跡が検出されており、注目される。

尾崎支台からさらに支谷を挟み、東に支台（仮称 麦丸新田支台）が隣接する。この支台は半島状の大きな支台で、東端は須久茂谷津（支谷）の開析によって萱田支台と分かれる。支台自体は幾つもの小支谷が開析し、小支台を形成している。

遺跡地名表の記載によると、八幡前遺跡は、縄文後期中葉加曾利B式・後期安行式、西内野南遺跡は、後期中葉加曾利B式とある。

参考文献

- 森 竜哉・中野修秀 2007 『西内野遺跡発掘調査報告書』 八千代市遺跡調査会
財団法人千葉県文化財センター 1997 『千葉県埋蔵文化財分布地図（1） - 東葛飾・印旛地区
（改訂版） -』



第2図 調査範囲及び各調査地区 (S=1:5000)

4. 内野南遺跡の調査履歴

本遺跡は、過去において、a地点～c地点の発掘調査が実施されている。

a地点は、平成9年3月5日～17日まで確認調査を実施し、本調査は同年3月24日に開始し、同年4月16日に終了した。本調査された面積は280㎡である。

調査の結果、縄文時代早期後半の炉穴5基（うち1基は1群3基である）、土坑8基（うち1基は早期中葉三戸式期の所産）、縄文時代以降では、奈良時代の竪穴住居跡1軒が検出された。

出土遺物は縄文式土器が、早期稲荷台式・三戸式・茅山上層式・前期黒浜式・浮島Ⅰ～Ⅲ式・中期加曾利EⅡ式（報文ではE3式）・後期加曾利B式で、石器は、敲石（報文では叩石）・石皿・磨石片で、奈良時代の土師器・須恵器である。この他には被熱礫がある。

b地点は、平成10年8月24日～9月10日まで確認調査を実施し、検出遺構はトレンチを拡張して、調査期間内で諸作業を終了した。調査された面積は774㎡である。

調査の結果、縄文時代の陥穴1基、土坑1基が検出された。

出土遺物は報文によれば、縄文式土器が、早期井草式・中期加曾利E式・後期加曾利B式で、少量出土とある。紙数の都合などで図化された遺物はなく、詳細は全く不明である。

c地点は、平成14年5月8日～6月7日まで確認調査を実施し、検出遺構はトレンチを拡張して、調査期間内で諸作業を終了した。調査された面積は84㎡である。

調査の結果、縄文時代の土坑7基が検出された。このうち、4ないし5基は陥穴と考えられる。

出土遺物は報文によれば、縄文式土器が、前期後半・中期後半・後期中葉が各1点、石鏃・剥片・礫各1点である。紙数の都合などで、石鏃と剥片以外は図化されていない。

以上が、本遺跡の調査履歴の概要である。



第3図 内野南d地点遺構配置図

第2章 検出された遺構と遺物

1. 縄文時代

今回の調査で竪穴住居跡8軒、陥穴1基、炉穴5基、ピット・土坑182基が検出された。調査時点でピットとして扱った遺構群のうち、竪穴住居跡と判断されたものは、名称を変更せずにそのまま掲載したことを、予めお断りしておきたい。さらに、ピットと土坑はあえて分別せず、同じ項目で扱う。

本調査に際して、確認調査時のトレンチ拡張部分を1区～6区と呼称したため、以下の記載では、位置関係は各区で表記することとする。

なお、遺物が出土しなかった遺構に関しては、「遺物」の項目の記述を割愛した。

(1) 竪穴住居跡（第4図～第8図）

D1（第4図）

位置 3区。重複関係 D2の破壊を受ける。平面形 やや不整な長方形を呈する。規模 7.60m×6.20m、遺構確認面からの深さ0.05m。壁 壁は垂直気味に立ち上がる。東壁、北壁及び西壁の大半が残存するが、南壁は消失している。床 ほぼソフトローム面の直床。特に顕著な硬化範囲は認められない。壁溝 検出されていない。炉 検出されていない。ピット 15本検出。主柱穴はP1・P2で、その他は補助的な柱穴である。貯蔵穴 検出されていない。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含み、ロームブロック少量含む）の単一層。遺物出土状態 覆土下層を中心に、やや散漫に分布しており、特に集中することはない。建て替え 認められない。

出土遺物（第4図）

出土総数は縄文式土器11点（条痕文2、浮島・興津9）で、うち9点をドットで取り上げた。

1は口縁部片。口縁部文様帯は斜行する条線帯を施し、その下に平行沈線を施す。浮島Ⅲ式土器である。2・3は三角文を横走施文した胴部片。4は器面調整痕のみの胴部片。

D2（第4図）

位置 3区。重複関係 D1を破壊する。平面形 不整な小判形を呈する。規模 4.02m×2.96m、遺構確認面からの深さ0.02m。壁 明瞭な立ち上がりは検出できなかった。床 ソフトロームの直床で、D1床面とほぼ同一レベルである。特に顕著な硬化範囲は認められない。壁溝 検出されていない。炉 検出されていない。ピット 5本検出。P1が主柱穴になるか。貯蔵穴 検出されていない。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック、ロームブロック含む）の単一層。遺物出土状態 覆土下層を中心に、やや散漫に分布しており、特に集中することはない。建て替え 認められない。

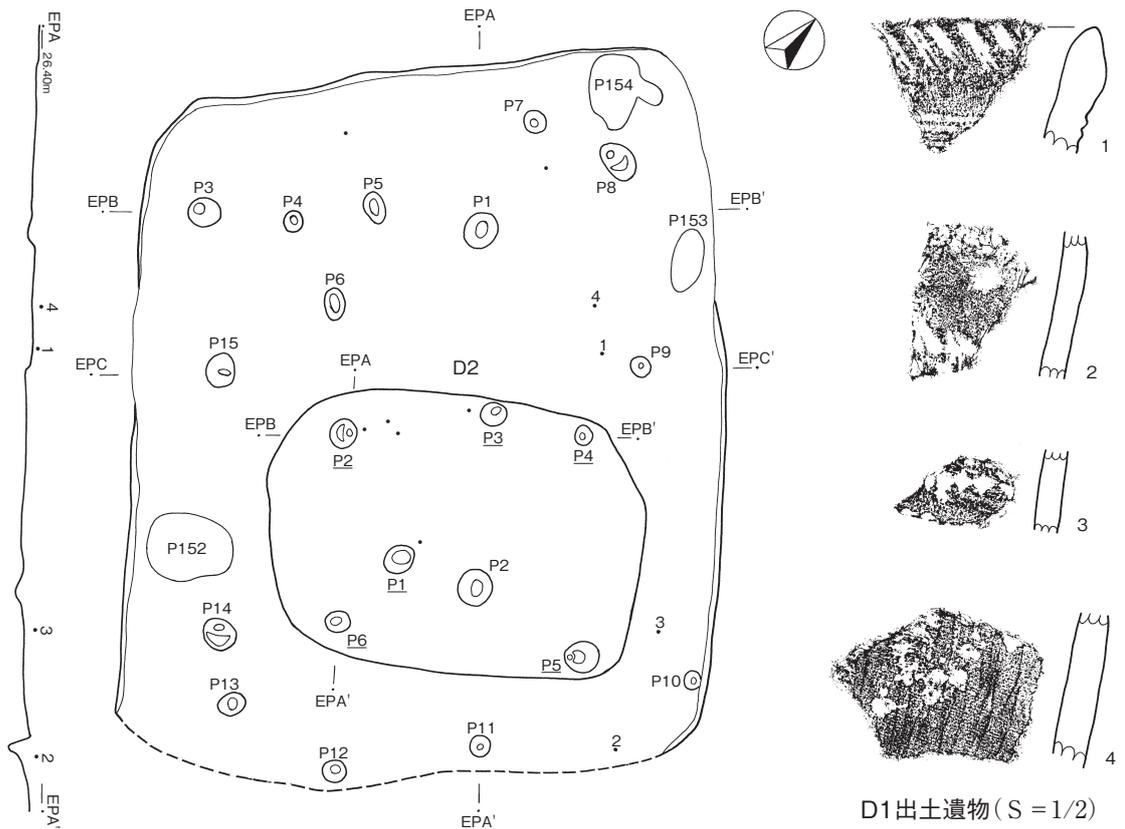
出土遺物（第4図）

出土総数は縄文式土器11点（条痕文4、浮島・興津7）、石4点で、うち9点をドットで取り上げた。

1は口縁部片。口縁部文様帯は縦位かつ密接の条線帯を施し、その下に三角文を横走・重畳施文する。興津Ⅰ式土器である。2は三角文と波状貝殻文を横走施文し、3は三角文を横走施文、4は地文として波状貝殻文（使用原体はハマグリか）を施した胴部片。

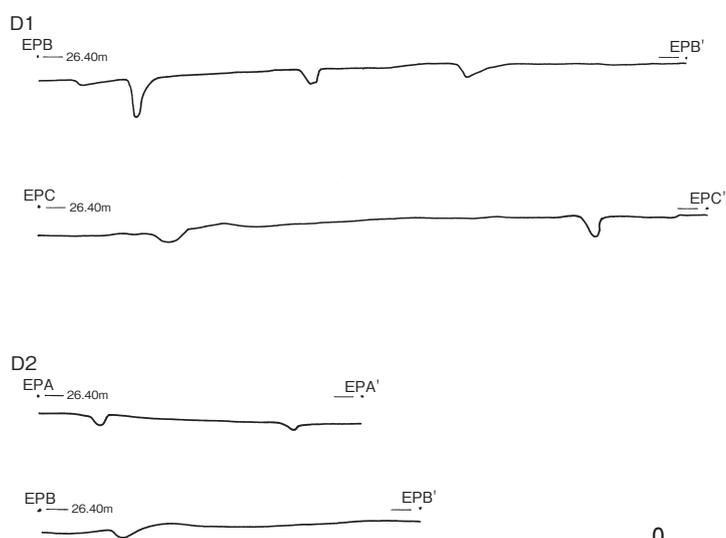
D4A（第5図）

位置 4区。重複関係 D4Bを破壊する。平面形 不整な楕円形を呈する。規模 7.15m×6.15m、遺構確認面からの深さ0.17m。壁 比較的ゆるやかに立ち上がる。壁自体は、西壁を除いて残存する。床 ほぼソフトローム上面を床面とする直床。特に顕著な硬化範囲は認められない。壁溝 検出されていない。炉 検出されていない。ピット 22本検出。主柱穴はP1・P2か。貯蔵穴 検出されてい

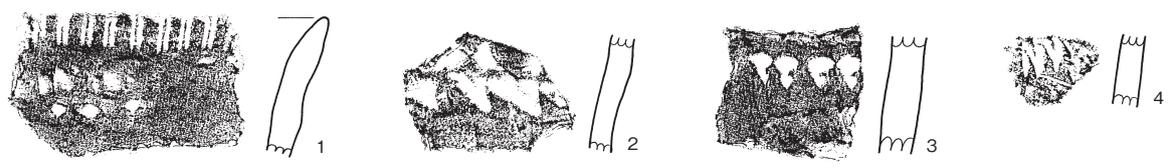


D1出土遺物 (S = 1/2)

※アンダーラインのついたピットはD2のもの



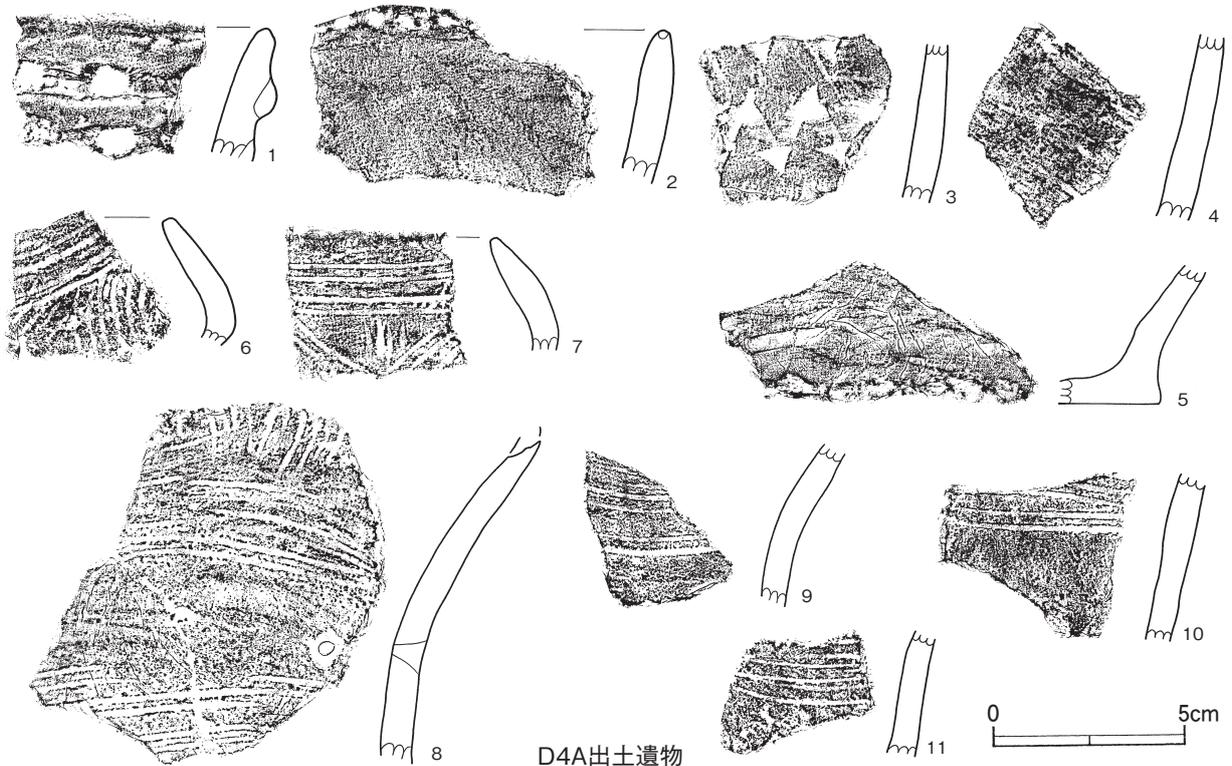
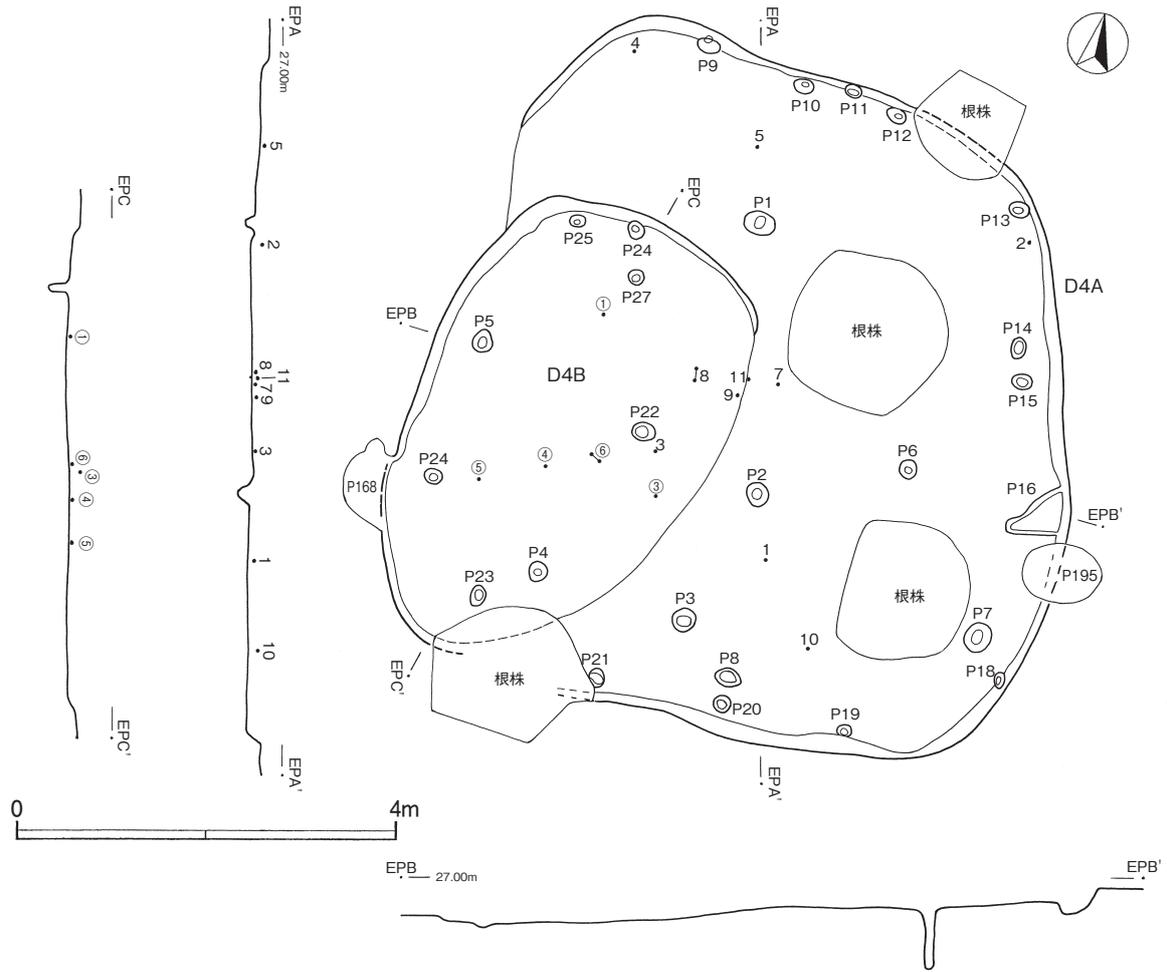
- | | |
|-----|--------|
| D1 | |
| P1 | - 7cm |
| P2 | - 7cm |
| P3 | - 4cm |
| P4 | - 7cm |
| P5 | - 13cm |
| P6 | - 7cm |
| P7 | - 31cm |
| P8 | - 18cm |
| P9 | - 32cm |
| P10 | - 7cm |
| P11 | - 14cm |
| P12 | - 7cm |
| P13 | - 17cm |
| P14 | - 40cm |
| P15 | - 14cm |
| D2 | |
| P1 | - 11cm |
| P2 | - 13cm |
| P3 | - 17cm |
| P4 | - 13cm |
| P5 | - 14cm |



D2出土遺物

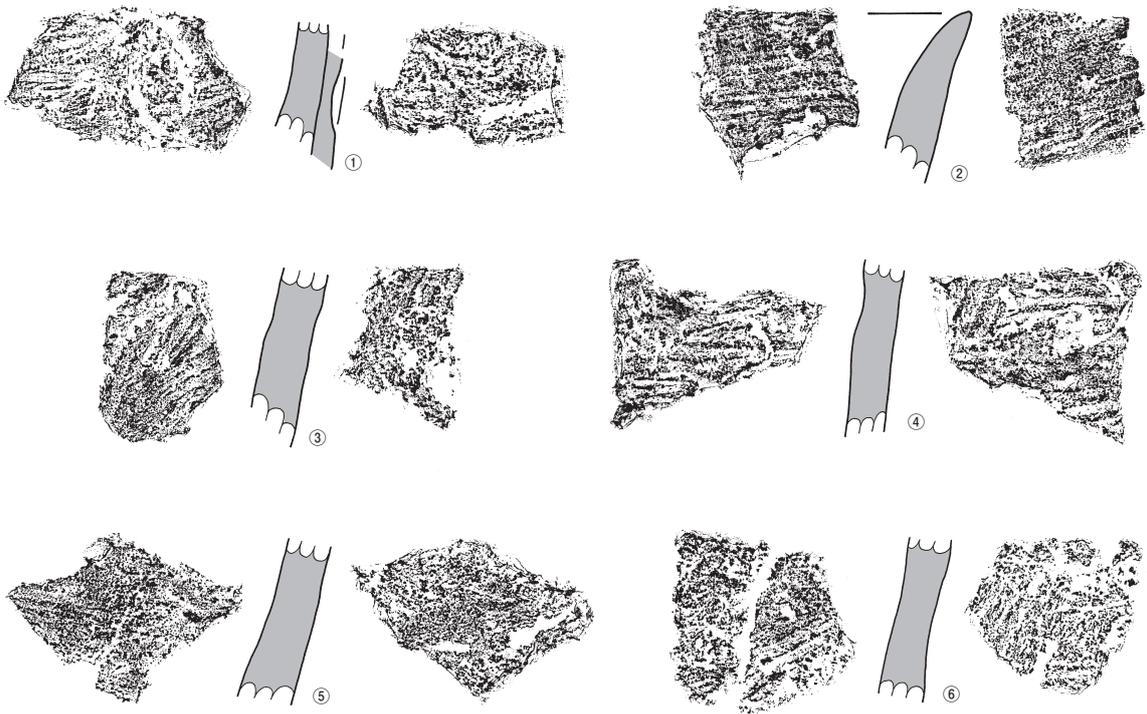


第4図 D1・D2実測図

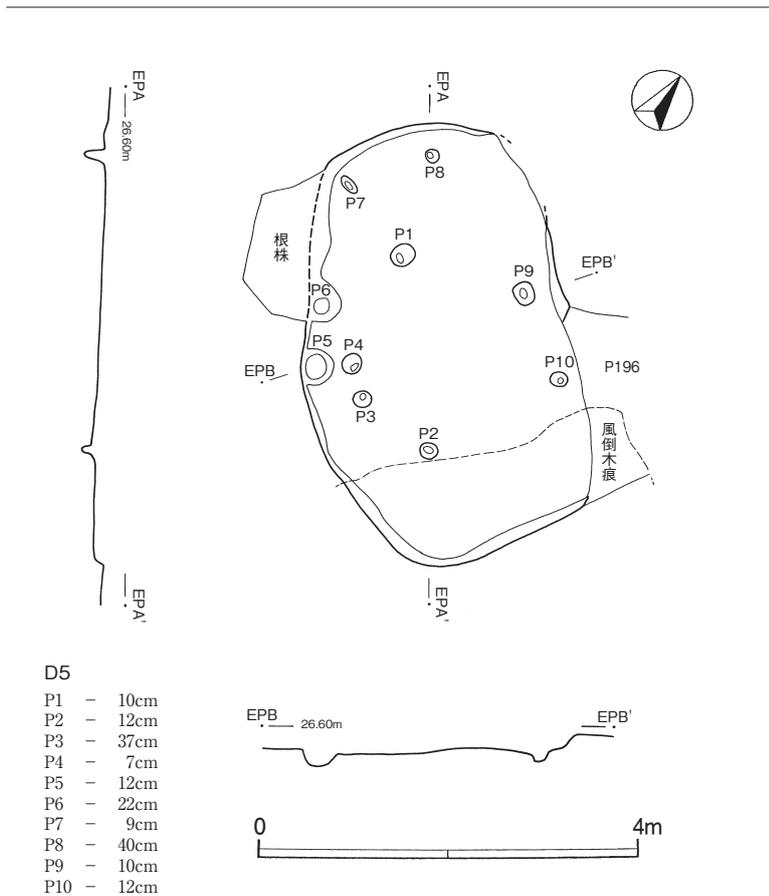


D4A出土遺物

第5図 D4A・B実測図

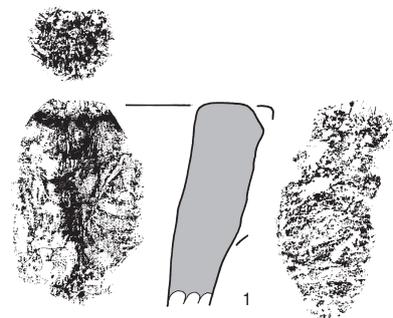


D4B出土遺物



D4

P1 - 10cm	P15 - 5cm
P2 - 16cm	P16 - 10cm
P3 - 14cm	P17 - 11cm
P4 - 15cm	P18 - 18cm
P5 - 6cm	P19 - 10cm
P6 - 63cm	P20 - 20cm
P7 - 8cm	P21 - 25cm
P8 - 9cm	P22 - 10cm
P9 - 18cm	P23 - 11cm
P10 - 6cm	P24 - 13cm
P11 - 14cm	P25 - 22cm
P12 - 22cm	P26 - 30cm
P13 - 19cm	P27 - 21cm
P14 - 5cm	



D5出土遺物 (S = 1/2)

D5

P1 - 10cm
P2 - 12cm
P3 - 37cm
P4 - 7cm
P5 - 12cm
P6 - 22cm
P7 - 9cm
P8 - 40cm
P9 - 10cm
P10 - 12cm

D5実測図

第6図 D4・D5実測図

い。覆土 大略2層に分層できた。上層は茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）、下層は褐色土（小振りのロームブロックやや目立つ）。遺物出土状態 覆土中にやや散漫に分布しており、特に集中することはない。建て替え 認められない。

出土遺物（第5図・第8図）

出土総数はA号・B号含めて縄文式土器123点（条痕文86、黒浜16、浮島・興津14、諸磯7）石器3点、石18点で、うち27点をドットで取り上げた（取り上げ時点ではA号・B号の分別はしていない）。

1は平縁で複合口縁をなす。凹凸文を横位に重畳施文する。2も平縁。口唇上に刺突列を施す。外面は調整痕のみで、ケズリ後ナデつけを行う。3は胴部片。ケズリ後に三角文を施文。5は胴下半～底部片。底部付近で大きくくびれ、底部端は若干外側へ張り出す。ここまでが浮島式土器である。

6～11は諸磯b式土器の沈線文系土器。胎土に石英・黒色粒子などを含み、外面暗褐色、内面淡褐色に焼成されている。6・7は口縁片。口縁端は内側へ屈曲するもので、6は波状縁、7は平縁の資料。

第8図12～14は石器。このうち、12・13は磨石片で、14は台石になるか。

D4B（第5図）

位置 4区。重複関係 D4Aに破壊される。平面形 楕円形を呈する。規模 5.10m×3.30m、遺構確認面からの深さ0.06m。壁 比較的ゆるやかに立ち上がる。北壁から西壁が残存する。床 ほぼソフトローム上面、一部ロームを掘り込んだ直床。特に顕著な硬化範囲は認められない。壁溝 検出されていない。炉 検出されていない。ピット 5本検出。P23・P27の2本が主柱穴か。貯蔵穴 検出されていない。覆土 褐色土（小振りのロームブロック、ロームブロック含み、しまる）の単一層。遺物出土状態 傾向としては、覆土下層から床面付近のものが多く、A号との重複部分では、A号の床面レベルよりも下からの出土であった。建て替え 認められない。

出土遺物（第6図）

A号の項を参照されたい。縄文式土器のうち条痕文系土器は86点を数えた。

①は口辺部。外面に縦位の隆帯を貼付し、内外面とも貝殻条痕を施す。茅山上層式土器。②は口縁部片。平縁の資料で、口唇部形態は内削ぎ気味である。③～⑥は内外面とも貝殻条痕を施した胴部片。③・⑤は内面の最終器面調整にナデつけを行っている。

D5（第6図）

位置 4区。重複関係 MM1の破壊を受け、P196と風倒木痕を破壊する。平面形 やや不整な楕円形を呈する。規模 4.70m×2.93m、遺構確認面からの深さ0.15m。壁 垂直気味に立ち上がる。北壁から南西壁にかけては比較的良好に残存する。床 風倒木痕の部分を除いて、ほぼソフトローム上面を床面とした直床。特に顕著な硬化範囲は認められない。壁溝 検出されていない。炉 検出されていない。ピット 10本検出。P1・P2が主柱穴。貯蔵穴 検出されていない。覆土 茶褐色土（ローム粒含み、小振りのロームブロックやや目立ち、しまる）の単一層。遺物出土状態 本跡では、遺物の出土量自体が少なく、覆土中に非常に散漫な分布を示している。建て替え 認められない。

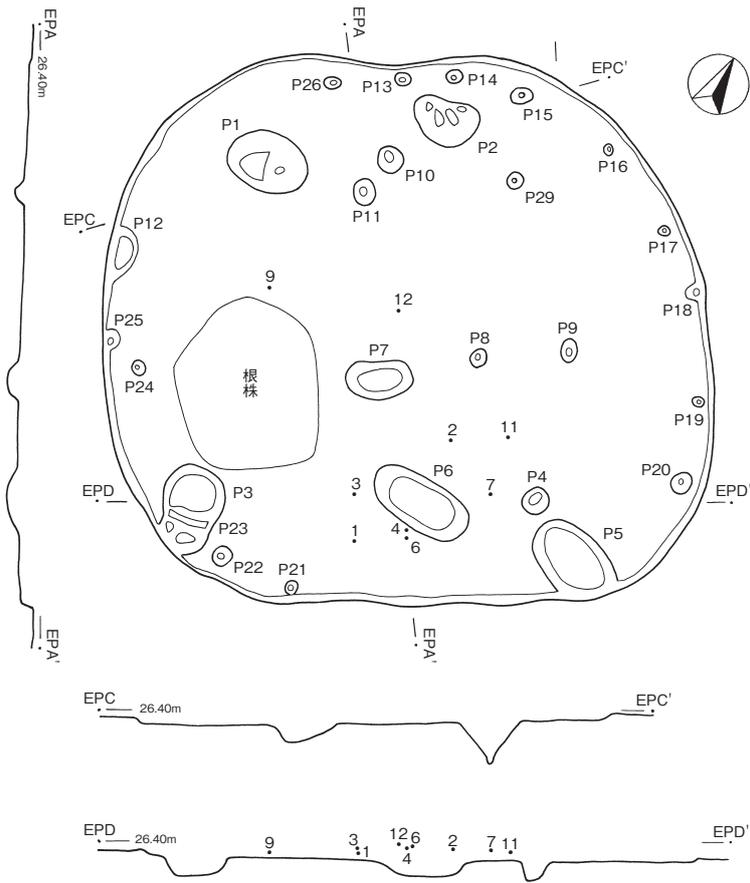
出土遺物（第6図）

出土総数は 縄文式土器6点（条痕文1、黒浜5）で、石1点。黒浜式土器は後代の混入。

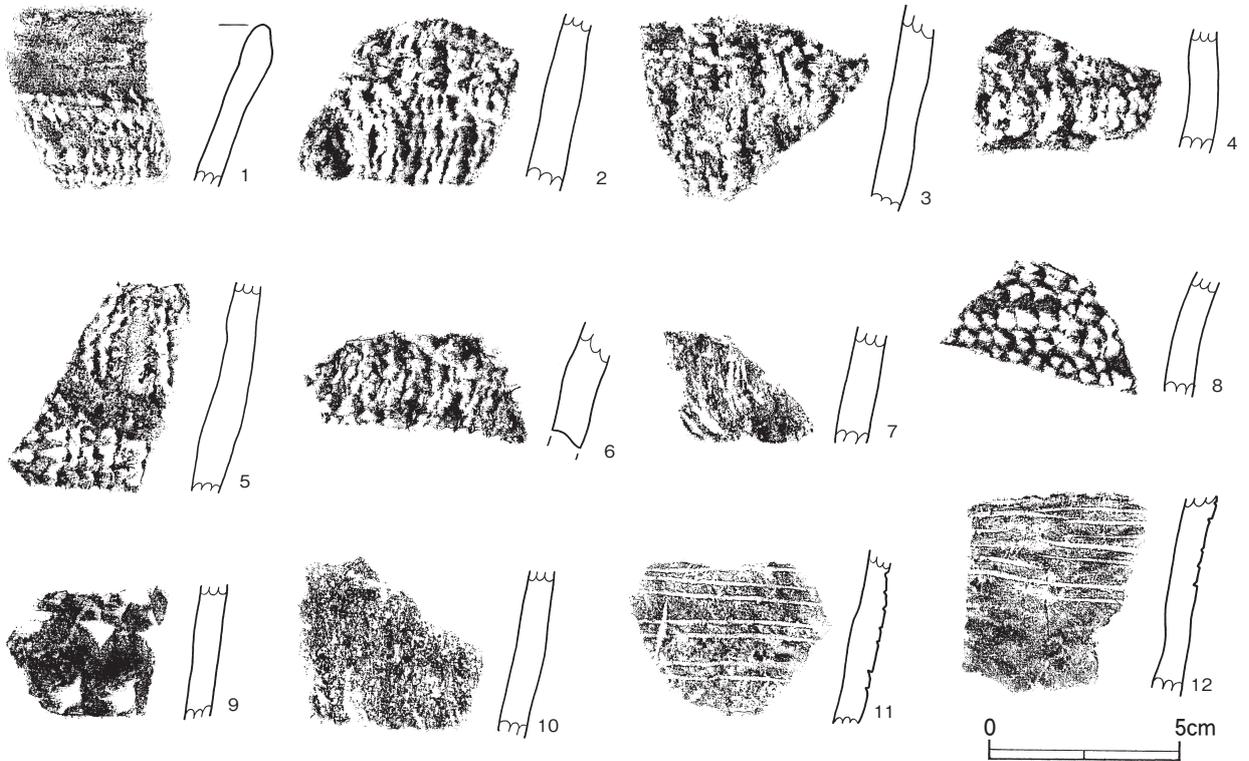
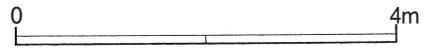
1は口縁部。波頂部下に縦位の隆帯を貼付する。内外面とも貝殻条痕を施す。

D6（第7図）

位置 4区。重複関係 単独で検出。平面形 不整な円形を呈する。規模 6.38m×5.80m、遺構確認面からの深さ0.13m。壁 ややゆるやかに立ち上がる。床 ほぼソフトローム上面を床面とした直床。特に顕著な硬化範囲は認められない。壁溝 検出されていない。炉 検出されていないが、P7が該当



- D6
- P1 - 24cm
 - P2 - 60cm
 - P3 - 17cm
 - P4 - 16cm
 - P5 - 9cm
 - P6 - 20cm
 - P7 - 13cm
 - P8 - 7cm
 - P9 - 7cm
 - P10 - 14cm
 - P11 - 17cm
 - P12 - 14cm
 - P13 - 11cm
 - P14 - 10cm
 - P15 - 16cm
 - P16 - 10cm
 - P17 - 10cm
 - P18 - 17cm
 - P19 - 8cm
 - P20 - 6cm
 - P21 - 27cm
 - P22 - 20cm
 - P23 - 19cm
 - P24 - 15cm
 - P25 - 18cm
 - P26 - 12cm
 - P27 - 7cm



第7图 D6実測図

するか。ピット 27本検出。P1～P4が主柱穴である。P12～P26は壁柱穴。貯蔵穴 P5が該当するか。覆土 大略2層に分層でき、上層茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）、下層は褐色土（小振りのロームブロック多量、ロームブロック含む）からなる。遺物出土状態 覆土中にやや散漫に分布しており、特に集中することはない。建て替え 認められない。

出土遺物（第7図・第8図）

出土総数は縄文式土器53点（条痕文8、黒浜19、浮島・興津23、諸磯3）、石器1点、石6点で、うち20点をドットで取り上げた。

1は口縁部片。平縁で、無文部をはさみ、地文の垂直刺突貝殻文を施す。2～6は同一個体か。深鉢の胴部片で、地文の垂直刺突貝殻文を施したもの。これらの使用原体は、フネガイ科の貝殻である。7も胴部片。地文の垂直刺突貝殻文を施すが、使用原体はハマグリか。8も上記とほぼ同様の属性を持つ。以上、8までは興津I式土器。9・10は三角文を横位に重畳施文するもので、興津式土器になるか。

11・12は諸磯b式土器の沈線文系土器に比定される。ともに横位の平行沈線を多条化施文した胴部片。胎土に石英・黒色粒子などを含み、内外面ともに灰褐色に焼成されている。

第8図13はP5内から出土した磨石片で、被熱痕が認められる。岩種は花崗岩か。

P29（第8図）

位置 3区。重複関係 P30の破壊を受ける。平面形 不整な隅丸三角形を呈する。規模 3.37m×2.44m、遺構確認面からの深さ0.15m。壁 比較的に立ち上がる。床 ローム漸移層から一部ソフトロームを掘り込んだ直床。特に顕著な硬化範囲は認められない。壁溝 検出されていない。炉 検出されていない。ピット 7本検出。P1・P2が主柱穴。その他は補助的な柱穴で、「片流れ状」の上屋構造が想定される。貯蔵穴 検出されていない。覆土 大略2層に分層でき、上層は暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）、下層は褐色土（小振りのロームブロック目立つ）。遺物出土状態 本跡では、遺物の出土量自体が少なく、覆土中に非常に散漫な分布を示している。建て替え 認められない。

出土遺物 出土総数は縄文式土器2点（浮島・興津）、石器？1点、石4点。このうち浮島・興津式土器はP30の混入と思われる。図化できるものはなかった。

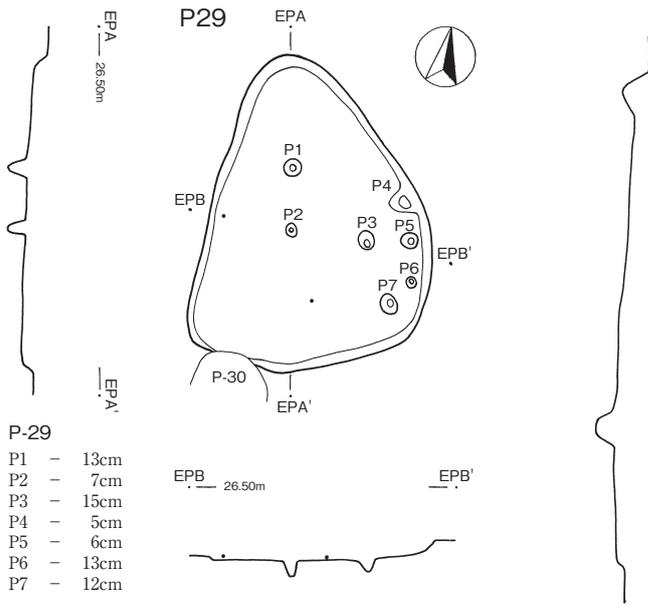
P169（第8図）

位置 4区。重複関係 P198の破壊を受け、P197を破壊する。平面形 やや不整な楕円形を呈する。規模 5.27m×2.12m、遺構確認面からの深さ0.26m。壁 ややゆるやかに立ち上がる。床 ほぼソフトロームを掘り込んだ直床。特に顕著な硬化範囲は認められない。壁溝 検出されていない。炉 検出されていない。ピット 10本検出。P1・P2が主柱穴。P10は出入口に該当するか。貯蔵穴 検出されていない。覆土 茶褐色土（ローム粒含み、小振りのロームブロック、ロームブロック含み、焼土粒少量含む）の単一層である。遺物出土状態 本跡では、覆土下層を中心に遺物の出土が認められた。建て替え 認められない。

出土遺物（第8図）

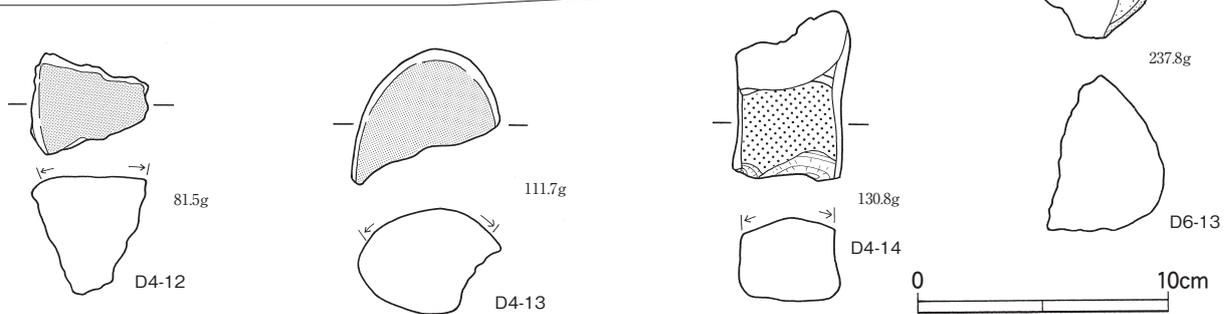
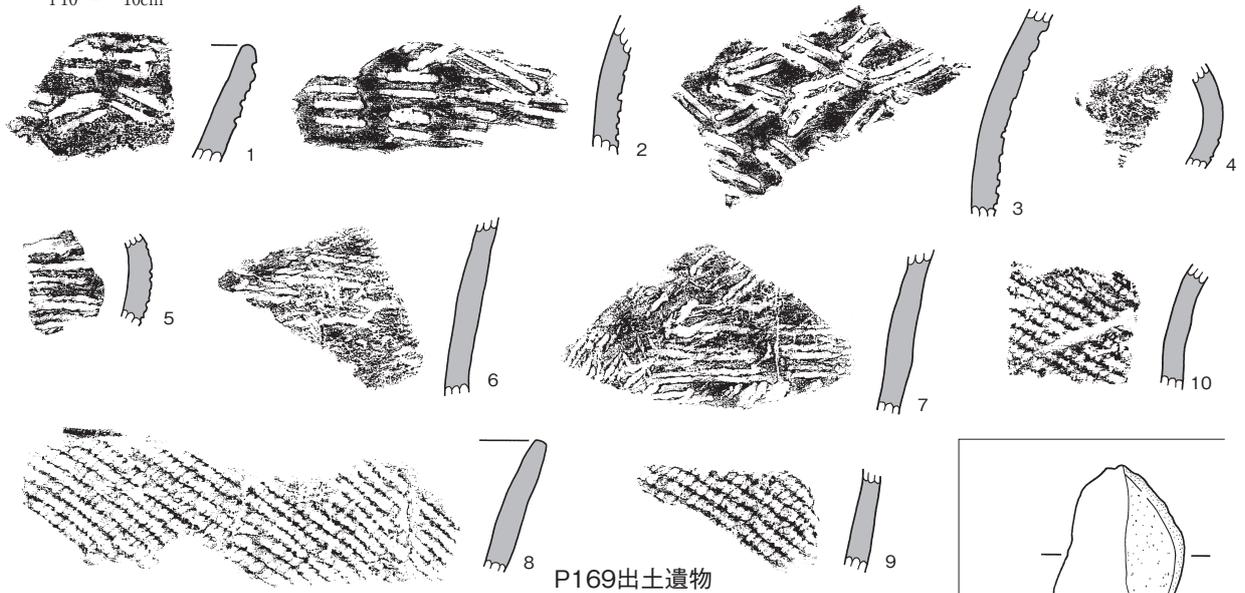
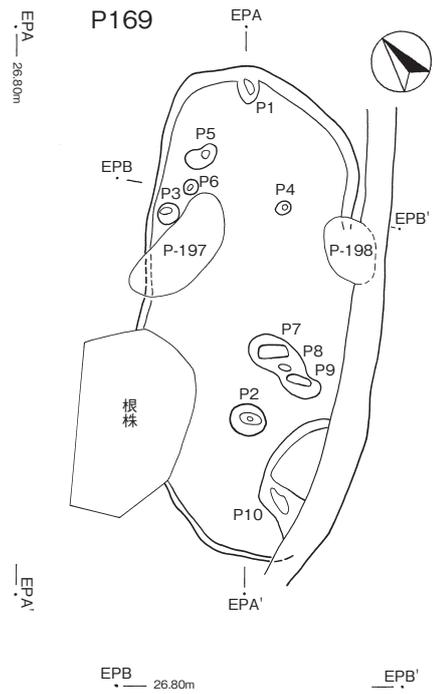
出土総数は 縄文式土器36点（条痕文5、黒浜28、浮島・興津3）、石1点。

1は口縁部。平縁で、口唇部の形状は略角頭状に近い。竹管による平行沈線を施すもの。2・3は同一個体。ともに胴部片で、竹管によるショートスパンの平行沈線を施す。これらは植房系。4は胴上半。無節ないしは「反撚り」を地文とするもの。5～7はその同一個体。8は口縁～胴部片。小波状縁を呈すると思われ、口唇部形態は角頭状。地文縄文2段LRを施すもので、施文のタイミングが早いこともあり、施文単位の両端が稜状に盛り上がっている。9は同一個体。10は地文縄文2段LRを施文した胴部片で、8と同一個体の可能性がある。なお、図化しなかった条痕文及び浮島・興津式土器は混入である。



- P-29
- P1 - 13cm
 - P2 - 7cm
 - P3 - 15cm
 - P4 - 5cm
 - P5 - 6cm
 - P6 - 13cm
 - P7 - 12cm

- P-169
- P1 - 14cm
 - P2 - 23cm
 - P3 - 11cm
 - P4 - 24cm
 - P5 - 13cm
 - P6 - 14cm
 - P7 - 8cm
 - P8 - 12cm
 - P9 - 17cm
 - P10 - 10cm



※石器は各住居跡出土

第8図 P29・P169実測図

(2) 炉穴 (第9図)

P 5 (第9図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 不整な楕円形を呈する。壁 ほぼソフトローム面が足場部となるため、極めて浅い。火床部・足場部 火床部は南北の端部の2箇所で見出されたが、新旧は不明で、ともに比較的焼けていない。足場部は底面中央部分が該当し、概ね平坦で、新旧時期の共有である。規模 上部で1.48m×1.23m、底部で0.96m×0.65m、検出面からの深さ0.87mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒子含む)で埋まっている。遺物 出土総数は縄文式土器1点のみで、時期的(前期後半)に後代の混入である蓋然性が高い。備考 本遺構は1群2基である。

P 55 (第9図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 アメーバ状を呈する。壁 比較的ゆるやかに立ち上がる。ほぼソフトローム中が足場部となるため、浅い。火床部・足場部 火床部は3箇所で見出され、仮に火床部A~Cとする。新旧はA→B→Cの順となる。火床部Aは小ピット状で、炉底ごとさらった可能性があり、ほとんど焼けた形跡は残っていない。火床部Bは一部Cの破壊を受けているが、焼けている。火床部Cは焼土の堆積も見られ、良く焼けている。足場部は火床部A・Bでは共有し、火床部Cは残存状態が良好で、比較的平坦である。規模 1.66m×1.07m、検出面からの深さ0.20mを測る。覆土 茶褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック、焼土粒、炭化物含む)で埋まっている。遺物 出土総数は縄文式土器3点、石1点。備考 本遺構は1群3基である。

P 158 (第9図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西-東。平面形 不整な楕円形を呈するか(一部未調査)。壁 ゆるやかに立ち上がる部分と、垂直気味の箇所がある。火床部・足場部 火床部は木根の下のため、検出できなかった。足場部はテラスを有し、凹凸あり。規模 (1.48)m×1.04m、検出面からの深さ0.52mを測る。覆土 黒褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック、焼土粒、炭化物含む)の単一層で埋まっている。遺物 出土総数は縄文式土器4点、石1点。

P 159 (第9図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 不明。平面形 不明(未調査部分が多いため)。壁 ゆるやかに立ち上がる。火床部・足場部 火床部は未検出。足場部は一部検出か。規模 (0.35)m×(0.72)m、検出面からの深さ0.26mを測る。覆土 黒褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む、焼土粒、炭化物やや目立つ)で埋まっている。

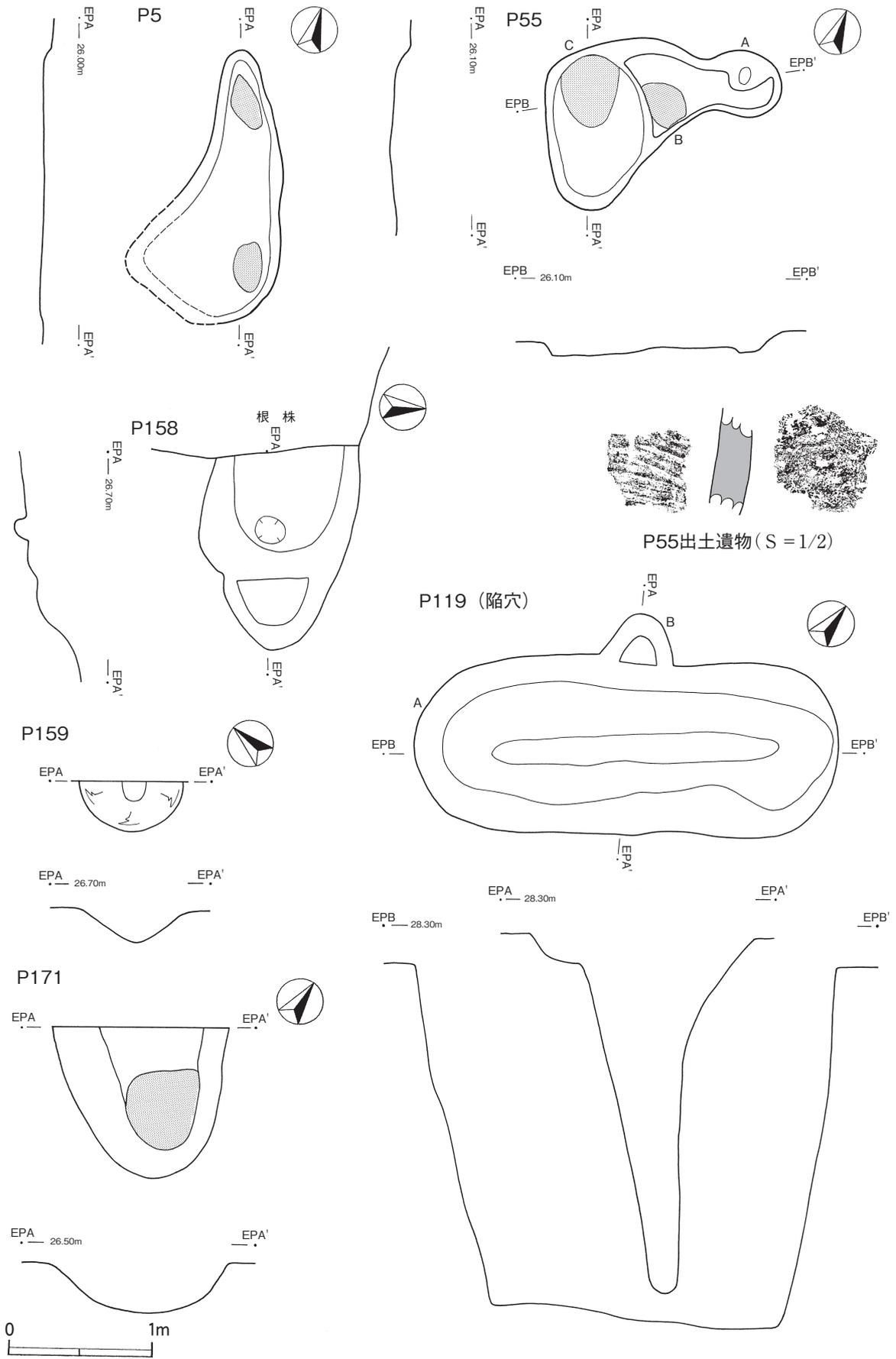
P 171 (第9図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 楕円形か(一部未調査)。壁 ゆるやかに立ち上がる。火床部・足場部 火床部は南の端部で見出され、良く焼けている。足場部は凹凸あり。規模 (1.05)m×(1.22)m検出面からの深さ0.35mを測る。覆土 黒褐色土(焼土粒やや目立ち、炭化物、小振りのロームブロック含む)で埋まっている。遺物 出土総数は縄文式土器1点。

(3) 陥穴 (第9図)

P 119A・B (第9図)

位置 1区。重複関係 P 119Bを破壊する。長軸 ほぼ西北西-東南東。平面形 上部、底部とも長楕円形を呈する。壁・底面 横断面形は漏斗形。長軸では若干オーバーハングする。底面は凹凸を有する。底部施設 検出されなかった。規模 上部で2.93m×1.21m、底部で0.92m×0.72m、検出面からの深さは2.53mを測る。B号は現存部で(0.53)m×(0.35)m、深さ0.17mを測るが、形状などは不



第9図 炉穴・陷穴実測図

明である。覆土 A号は大略4層に分層でき、下から暗褐色土→褐色土→茶褐色土→黒褐色土の順で埋まっている。最下層の暗褐色土は使用時のもので、褐色土は壁の崩落土、茶褐色土の一部もまた、壁の崩落土である可能性が高い。褐色土より上が自然埋没を示す。B号の覆土は茶褐色土系の単一土層。

(4) ピット・土坑 (第10図～第19図)

P 1 (第10図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 上部、底部とも略円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味立ち上がり、底面は丸みを帯び、凹凸あり。規模 0.44m×0.36m、検出面からの深さは0.39mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む)の単一層である。

P 2 (第10図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 上部、底部とも略円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.31m×0.24m、検出面からの深さは0.08mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒含む)の単一層。

P 3 (第10図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.46m×0.32m、検出面からの深さは0.06mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒少量含む)の単一層。

P 4 (第10図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 上部、底部とも卵形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 1.87m×1.23m、検出面からの深さは0.32mを測る。覆土 大略2層に分層でき、上層は暗褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む)、下層は茶褐色土である。遺物 出土総数は縄文式土器14点(条痕文9、浮島・興津5)。このうち、浮島・興津式土器は上層部分での混入と考えられる。

P 6 (第10図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部、底部とも卵形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯び、凹凸あり。規模 1.70m×1.29m、検出面からの深さは0.24mを測る。覆土 茶褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む)の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器3点(浮島・興津)。

P 7 (第10図)

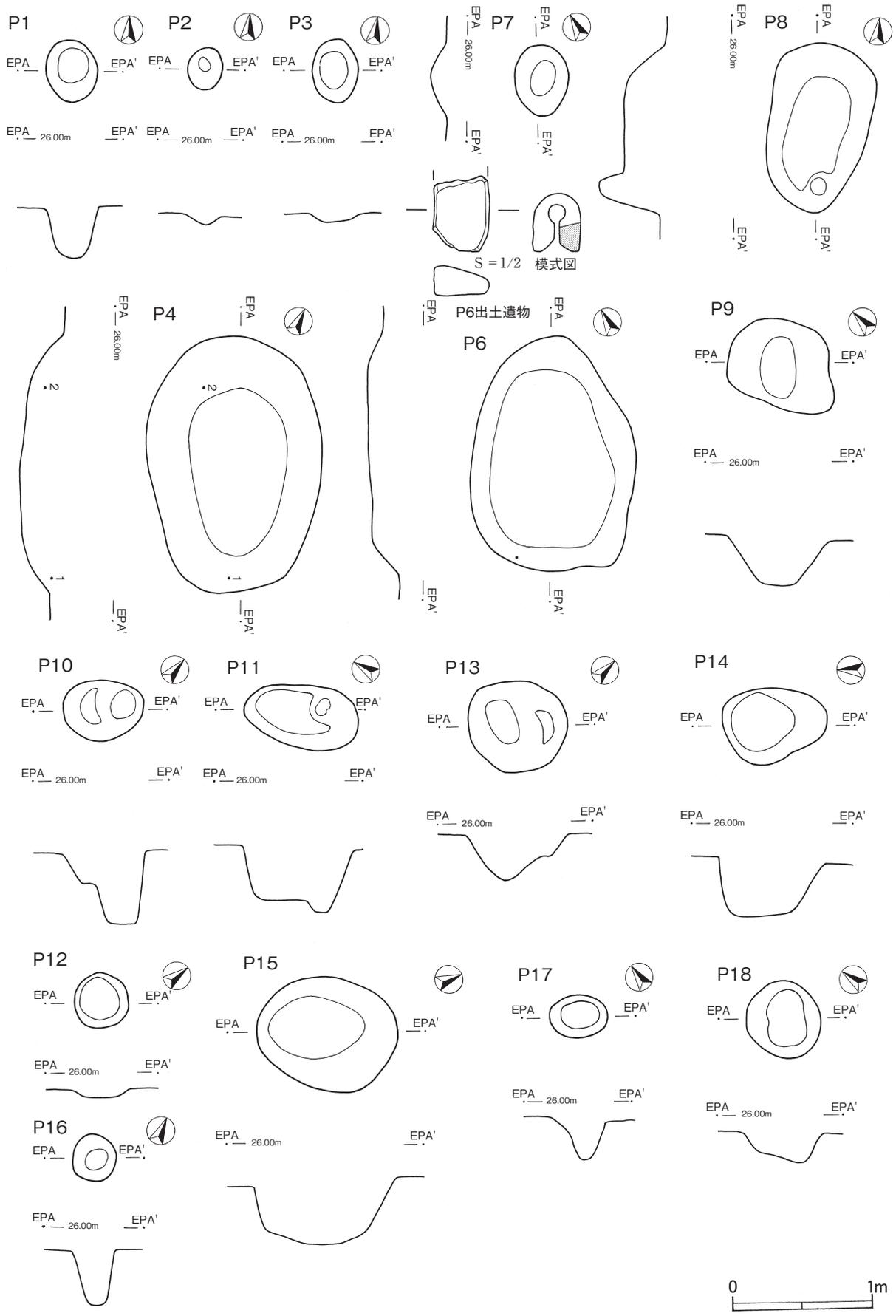
位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ東北東-西南西。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.51m×0.39m、検出面からの深さは0.10mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒含む)の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器1点(浮島・興津)。

P 8 (第10図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面はテラスを有し、小ピットあり。規模 1.23m×0.74m、検出面からの深さは0.32mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む)の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器4点(浮島・興津)。

P 9 (第10図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも不整円形を呈す



第10図 ピット実測図 (1)

る。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 0.86m×0.64m、検出面からの深さは0.35mを測る。覆土 大略2層に分層でき、上層は暗褐色土（ローム粒含む）、下層は褐色土。

P10（第10図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ東北東－西南西。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は北側にテラスを有する。規模 0.59m×0.46m、検出面からの深さは0.39mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器2点（浮島・興津）。

P11（第10図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－南南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面はテラスを有し、長軸端に小ピットあり。規模 0.82m×0.47m、検出面からの深さは0.49mを測る。覆土 大略2層に分層でき、壁際は褐色土で、他は暗褐色土（ローム粒含む）である。遺物 出土総数は縄文式土器1点（浮島・興津）。

P12（第10図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面はやや凹凸あり。規模 0.39m×0.39m、検出面からの深さは0.07mを測る。覆土 茶褐色土（小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P13（第10図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西－東南東。平面形 上部、底部とも略円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面はテラスを有し、凹凸あり。規模 0.74m×0.68m、検出面からの深さは0.35mを測る。覆土 大略2層に分層でき、上層は黒褐色土（小振りのロームブロック含む）主体で、下層は暗褐色土。

P14（第10図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北－南。平面形 上部、底部とも卵形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面はやや凹凸あり。規模 0.74m×0.55m、検出面からの深さは0.45mを測る。覆土 茶褐色土（小振りのロームブロック含む）の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器2点（浮島・興津）。

P15（第10図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東－南西。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 1.02m×0.84m、検出面からの深さは0.48mを測る。覆土 茶褐色土（小振りのロームブロックやや目立つ）の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器4点（条痕文1、浮島・興津3）。

P16（第10図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がるが、底面に向かって先すぼまり状となる。規模 0.34m×0.31m、検出面からの深さは0.41mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒含む）の単一層である。

P17（第10図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西－南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.42m×0.29m、検出面からの深さは0.23mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒含む）の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器1点（浮島・興津）。

P18 (第10図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西-東南東。平面形 上部、底部とも不整円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸に富む。規模 0.57m×0.53m、検出面からの深さは0.25mを測る。覆土 茶褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む)の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器1点(興津I式)。

P19 (第11図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西-東南東。平面形 上部、底部とも略円形を呈する。壁・底面 壁は比較的垂直に立ち上がる。底面は比較的平坦。規模 0.60m×0.59m、検出面からの深さは0.15mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒含み、小振りのロームブロック少量含む)の単一層。

P20 (第11図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ東北東-西南西。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.57m×0.41m、検出面からの深さは0.21mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む)の単一層である。

P21 (第11図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西-東南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 0.54m×0.43m、検出面からの深さは0.20mを測る。覆土 暗褐色土(小振りのロームブロック少量含む)の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器1点(浮島・興津)。

P22A・B (第11図)

位置 3区。重複関係 本来的には2基の重複。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 2基が重複するため、見かけの形状は上部、底部とも瓢箪形を呈する。壁・底面 A壁は垂直気味に立ち上がり、底面に向かって先すぼまり状。B壁は垂直気味に立ち上がり、底面は比較的平坦。規模 A0.41m×0.41m、検出面からの深さは0.39m、B0.84m×0.84mを測る。覆土 茶褐色土(小振りのロームブロック含む)の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器2点(浮島・興津)。

P23 (第11図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸少ない。規模 0.90m×0.47m、検出面からの深さは0.41mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む)の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器1点(浮島・興津)。

P24 (第11図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がる。底面は二段状となり、凹凸に富む。規模 2.42m×1.40m、検出面からの深さは0.40mを測る。覆土 茶褐色土(ローム粒、小振りのロームブロックやや目立つ)。

P25 (第11図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.52m×0.28m、検出面からの深さは0.21mを測る。覆土 茶褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む)の単一層。遺物 出土総数は縄文式土器2点(条痕文)。

P26 (第11図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも略円形を呈する。

壁・底面 南壁は垂直気味で、北壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 0.49m×0.40m、検出面からの深さは0.32mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P27（第11図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－南南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 北壁は垂直気味で、南壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 0.38m×0.29m、検出面からの深さは0.12mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層。全て自然堆積である。遺物 出土総数は縄文式土器1点（浮島・興津）。

P28（第11図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西－東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 南壁は垂直気味で、北壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸あり。規模 0.71m×0.55m、検出面からの深さは0.13mを測る。覆土 褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一土層である。遺物 出土総数は縄文式土器1点（浮島・興津）。

P30（第11図）

位置 3区。重複関係 P29を破壊する。長軸 ほぼ北－南。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 南壁は垂直気味で、北壁はゆるやかに立ち上がる。底面はやや凹凸あり。規模 0.94m×0.88m、検出面からの深さは0.19mを測る。覆土 暗褐色土（小振りのロームブロックやや目立つ）の単一土層である。遺物 出土総数は縄文式土器2点（浮島・興津）。

P31（第11図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－南南東。平面形 上部、底部とも略円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面はテラスを有し、凹凸に富む。規模 0.81m×0.71m、検出面からの深さは0.22mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一土層である。遺物 出土総数は縄文式土器1点（条痕文）。

P32（第11図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東－南南西。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 南壁は垂直気味で、北壁はそれよりもゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸を有する。規模 0.57m×0.37m、検出面からの深さは0.33mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒含む）の単一土層である。遺物 出土総数は縄文式土器1点（条痕文）。

P33（第11図）

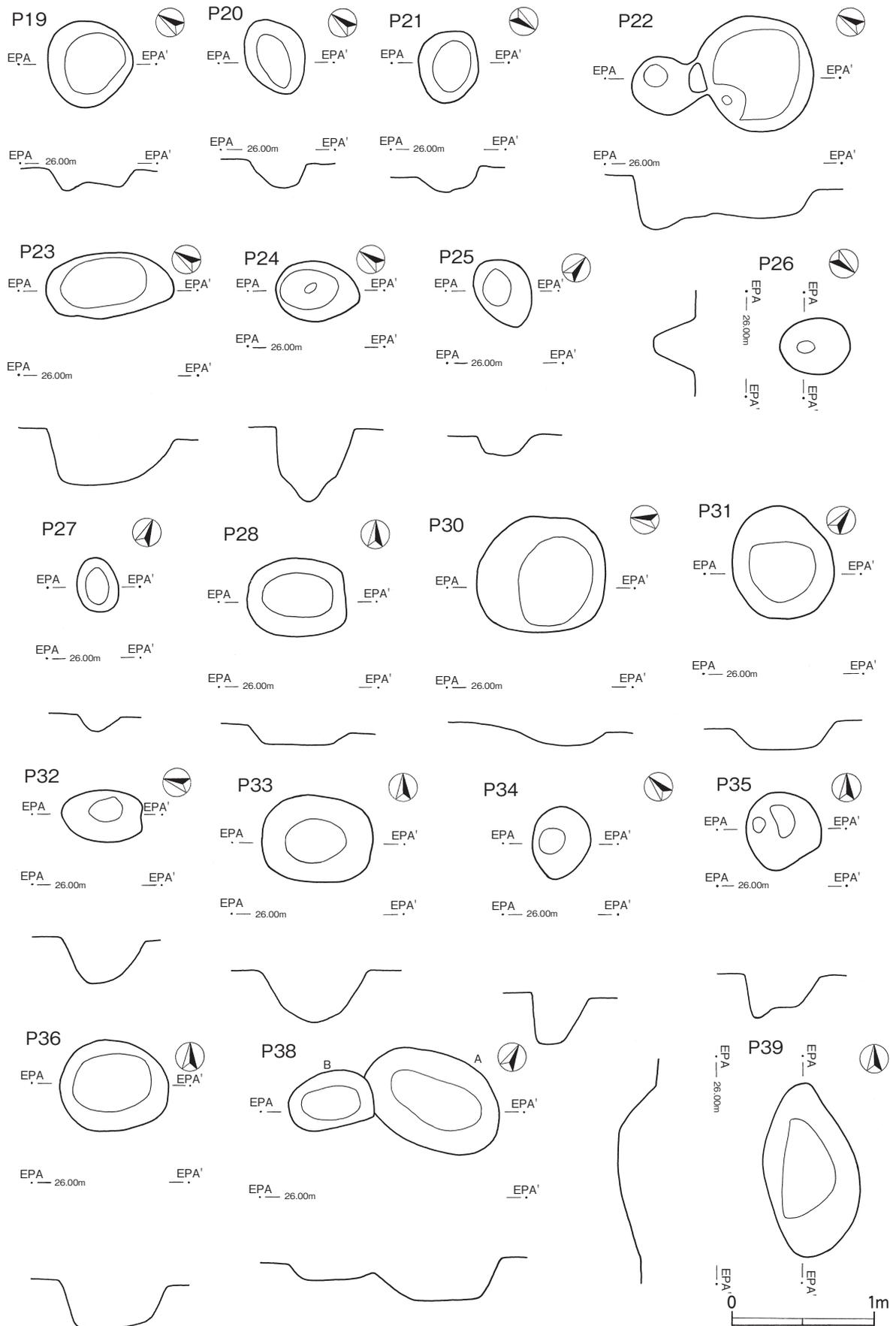
位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西－南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はややゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 0.78m×0.61m、検出面からの深さは0.39mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロックやや目立つ）の単一土層である。遺物 出土総数は縄文式土器1点（条痕文）。

P34（第11図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東－南西。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸に富む。規模 0.52m×0.40m、検出面からの深さは0.35mを測る。覆土 茶褐色土（小振りのロームブロックやや目立つ）の単一土層である。

P35（第11図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西－東南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面はテラスを有し、凹凸に富んでおり、一端にピットあり。



第11図 ピット実測図 (2)

規模 0.56m×0.53m、検出面からの深さは0.34mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒少量、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P36（第11図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西－南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 0.75m×0.65m、検出面からの深さは0.34mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。遺物 出土総数は石1点。

P38A（第11図）

位置 区。重複関係 P38Bと重複する。長軸 ほぼ西北西－東南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯び、凹凸あり。規模 1.00m×0.67m、検出面からの深さは0.34mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器2点（条痕文）。

P38B（第11図）

位置 3区。重複関係 P38Aと重複する。長軸 ほぼ西－東。平面形 上部、底部とも不整楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 0.59m×0.39m、検出面からの深さは0.13mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒含み、小振りのロームブロック少量含む）の単一層である。

P39（第11図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東－南西。平面形 上部、底部とも不整楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸に富む。規模 1.22m×0.65m、検出面からの深さは0.37mを測る。覆土 褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック、ロームブロック含む）の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器3点（条痕文）。

P40（第12図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西－東南東。平面形 上部、底部とも長楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 1.24m×0.27m、検出面からの深さは0.27mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック、ロームブロック含む）の単一層である。

P41（第12図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西－東南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面はやや凹凸目立つ。規模 0.45m×0.38m、検出面からの深さは0.10mを測る。覆土 茶褐色土（小振りのロームブロックやや目立つ）の単一層。遺物 出土総数は縄文式土器1点（浮島・興津）。

P42（第12図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西－南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 東壁は垂直気味で、西壁はゆるやかに立ち上がる。底面はやや凹凸目立つ。規模 0.44m×0.38m、検出面からの深さは0.18mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。遺物 出土総数は石2点。

P43（第12図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西－東南東。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面はテラスを有し、凹凸あり。規模 0.40m×0.36m、検出

面からの深さは0.34mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P 44（第12図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東－南南西。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 南壁は垂直気味で、北壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸あり。規模 0.58m×0.47m、検出面からの深さは0.24mを測る。覆土 暗褐色土（小振りのロームブロック含む）の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器1点（浮島・興津）。

P 45（第12図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東－南南西。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がるが、底面に向かって先すぼまり状となる。規模 0.31m×0.23m、検出面からの深さは0.57mを測る。覆土 暗褐色土（ロームブロックやや目立つ）の単一層である。

P 46（第12図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北－南。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面はテラスを有し、ピット状にくぼむ規模 0.83m×0.31m、検出面からの深さは0.25mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロックやや目立つ）の単一層である。

P 47（第12図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－南南東。平面形 上部、底部とも不整形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸を有する。規模 0.45m×0.39m、検出面からの深さは0.10mを測る。覆土 暗褐色土（小振りのロームブロックやや目立つ）の単一層である。

P 48（第12図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東－南西。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 西壁は垂直気味で、東壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸を有する。規模 1.23m×0.82m、検出面からの深さは0.44mを測る。覆土 暗褐色土（小振りのロームブロックやや目立つ）の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器6点（条痕文）。

P 49（第12図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西－東南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸を有する。規模 1.37m×0.84m、検出面からの深さは0.37mを測る。覆土 大略2層に分層でき、上層は暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）、下層は茶褐色土。遺物 出土総数は縄文式土器8点（条痕文7、黒浜1）。黒浜式は混入。

P 50（第12図）

位置 3区。重複関係 P51を破壊する。長軸 ほぼ北西－南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 南壁は垂直気味で、北壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸を有する。規模 0.84m×0.55m、検出面からの深さは0.30mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器3点（浮島・興津2、加曾利B式1）。

P 51（第12図）

位置 3区。重複関係 P50の破壊を受ける。長軸 ほぼ北東－南西。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸に富む。規模 0.34m×0.31m、検出面からの深さは0.30mを測る。覆土 褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック目立つ）の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器2点（浮島・興津）。

P 52 (第12図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西－東南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 南壁は垂直気味で、北壁はゆるやかに立ち上がる。底面は北側にテラスを有し、凹凸を有する。規模 1.20m×0.77m、検出面からの深さは0.44mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P 53 (第12図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東－南西。平面形 上部はやや不整な楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面はテラスを有し、ピット3基が掘られている。規模 0.71m×0.46m、検出面からの深さは0.33m（最深部）を測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック少量含む）の単一層。備考 本跡はピット3基の集合体である。

P 54 (第12図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西－東。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸底状となる。規模 0.36m×0.32m、検出面からの深さは0.12mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。遺物 出土総数は石1点。

P 57 (第12図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東－南西。平面形 上部、底部ともやや不整な卵形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯び、中央付近がピット状にくぼむ。規模 1.62m×1.18m、検出面からの深さは0.48mを測る。覆土 黒褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含み、焼土、炭化物ごく少量含む。）の単一層。遺物 出土総数は縄文式土器2点（黒浜）、石3点。備考 黒浜式土器は本跡のごく周辺からも出土している。

P 58 (第12図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西－南東。平面形 上部、底部ともアメーバ状を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 0.82m×0.55m、検出面からの深さは0.07mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック多量に含む）の単一層である。

P 59 (第12図)

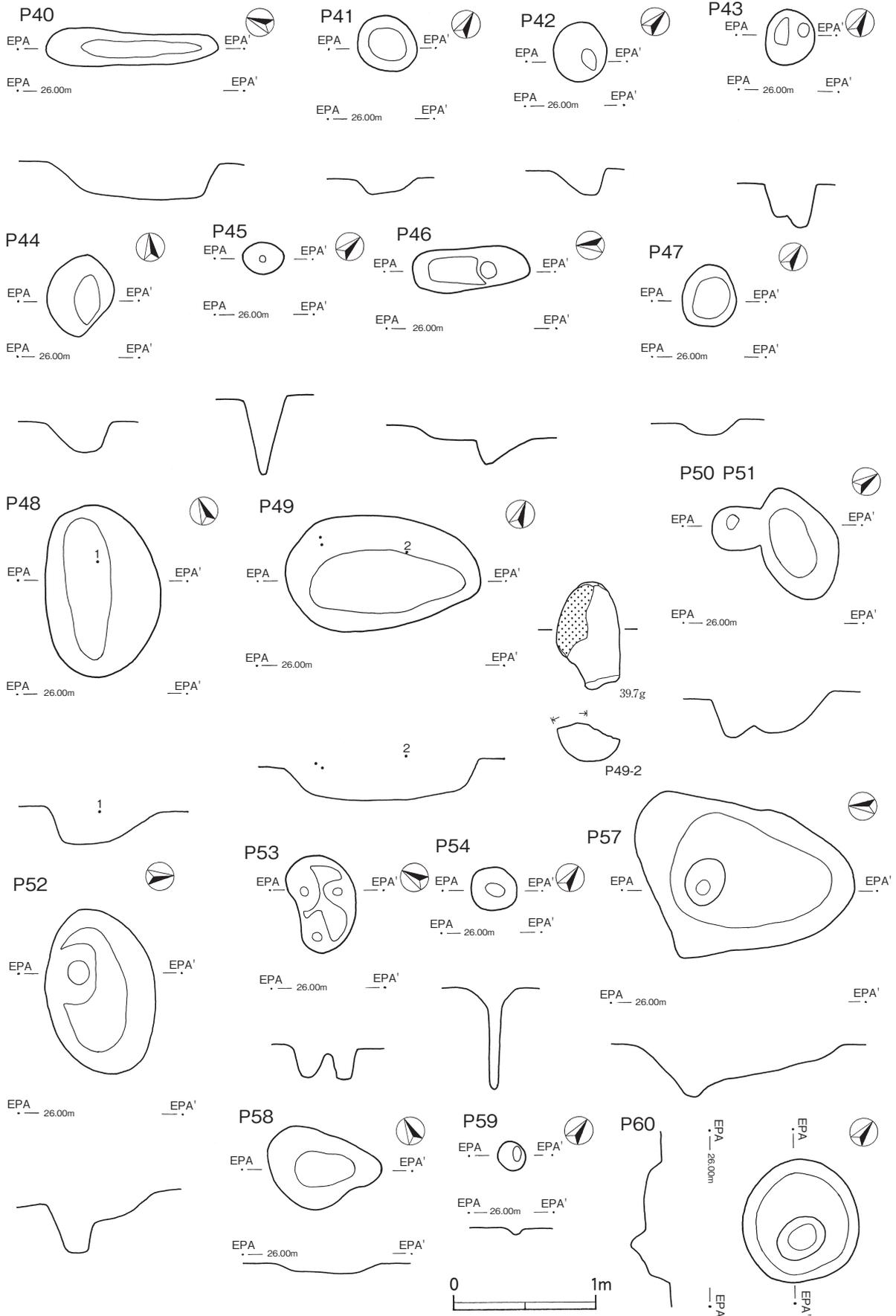
位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西－東南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 南壁は垂直気味で、北壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 0.22m×0.19m、検出面からの深さは0.15mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P 60 (第12図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－南南東。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸目立ち、中央はピット状にくぼむ。規模 0.89m×0.82m、検出面からの深さは0.23mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック目立つ）の単一層である。

P 61 (第13図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東－南南西。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は底面に向かって傾斜する。底面に「あたり」あり。規模 0.23m×0.19m、検出面からの深さは0.23mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック少量含む）の単一層。備考 本跡は柱穴状のピットと考えられる。



第12図 ピット実測図 (3)

P 63 (第13図)

位置 3区。重複関係 P64と重複する。長軸 ほぼ西-東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がる。底面はテラスを有し、一端がピット状にくぼむ。規模 0.45m×0.30m、検出面からの深さは0.49mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック少量含む)の単一層である。

P 64 (第13図)

位置 3区。重複関係 P63と重複する。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸底状で、やや凹凸あり。規模 0.84m×0.78m、検出面からの深さは0.23mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む)の単一層である。

P 65 (第13図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西-東。平面形 上部、底部とも不整な円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面はテラスを有し、一端にピットあり。規模 1.22m×1.06m、検出面からの深さは0.38mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック多量に含む)の単一土層である。遺物 出土総数は縄文式土器6点(条痕文3、浮島・興津3)。

P 66 (第13図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも略円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 0.37m×0.33m、検出面からの深さは0.19mを測る。覆土 茶褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック目立つ)の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器1点(条痕文)。

P 67 (第13図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 北西壁は垂直気味で、南東他はゆるやかに立ち上がる。底面はテラスを有し、一端がピット状にくぼむ。規模 0.43m×0.34m、検出面からの深さは0.20mを測る。覆土 暗褐色土(小振りのロームブロック含む)の単一層である。遺物 出土総数は石1点。

P 68 (第13図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.59m×0.43m、検出面からの深さは0.17mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む)の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器1点(浮島・興津)。

P 69 (第13図)

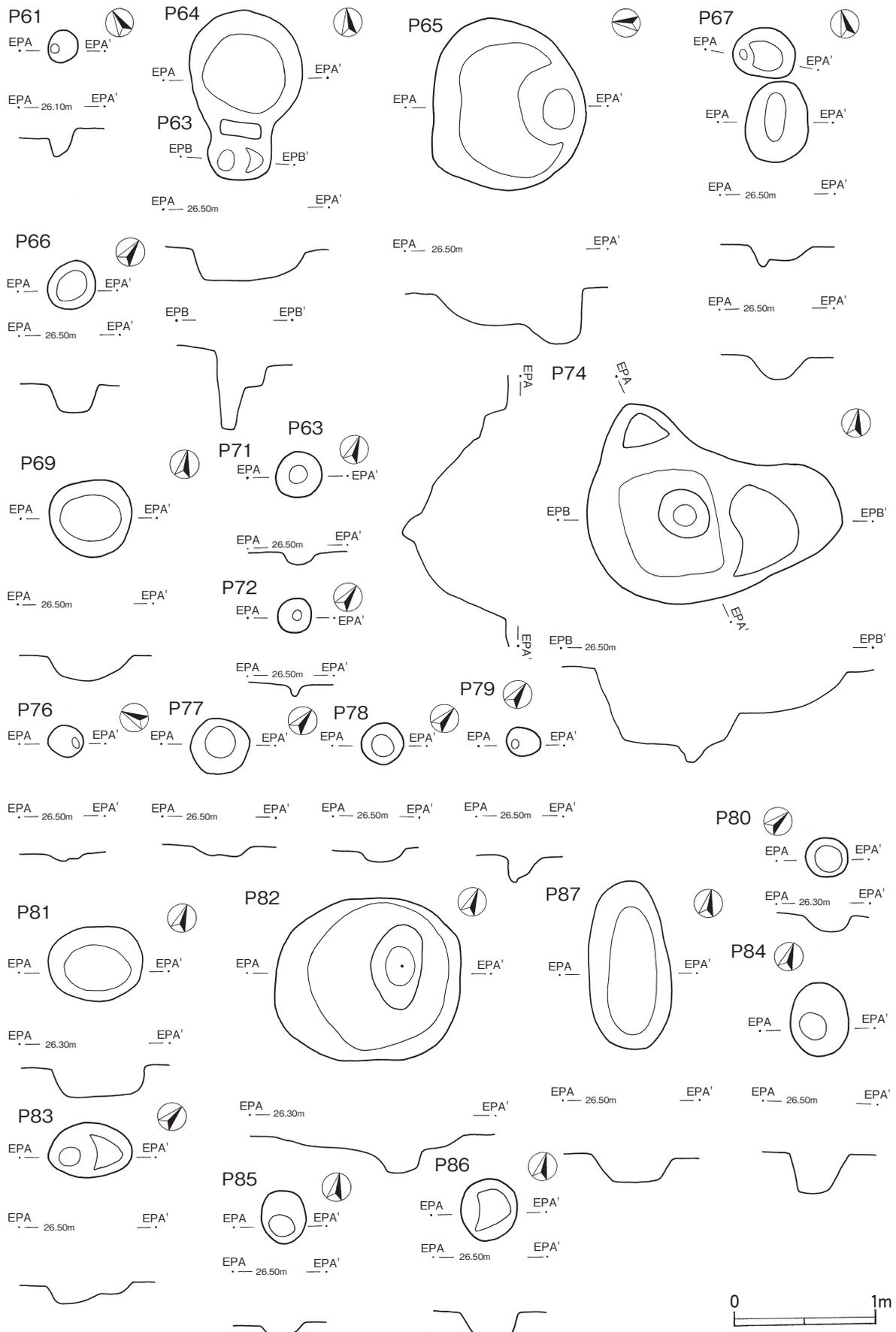
位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部、底部とも不整円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 0.56m×0.54m、検出面からの深さは0.19mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む)の単一層である。

P 71 (第13図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸底気味となる。規模 0.33m×0.31m、検出面からの深さは0.11mを測る。覆土 茶褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む)の単一層である。

P 72 (第13図)

位置 3区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・



第13図 ピット実測図 (4)

底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.25m×0.24m、検出面からの深さは0.12mを測る。覆土 暗褐色土（小振りのロームブロックやや目立つ）の単一層である。

P73（第13図）

位置 3区。重複関係 P74の破壊を受ける。長軸 ほぼ北西－南東。平面形 上部、底部とも円形か。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸を有する。規模 (0.62) m×(0.34) m、検出面からの深さは0.20mを測る。覆土 茶褐色土（小振りのロームブロックやや目立つ）の単一層。

P74（第13図）

位置 3区。重複関係 P73を破壊する。長軸 ほぼ北東－南西。平面形 上部、底部とも不整楕円形を呈する。壁・底面 壁は東壁を除いて垂直気味に立ち上がる。底面はテラスを有し、下段の底面にピットを有する。底面自体は凹凸あり。規模 1.79m×1.16m、検出面からの深さはテラス部で0.36m、下段で0.54m、最深部で0.71mを測る。覆土 大略2層に分層でき、上層は暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）で、下層は茶褐色土。遺物 出土総数は縄文式土器1点（浮島・興津）。

P76（第13図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西－東。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 2.42m×1.40m、検出面からの深さは0.40mを測る。覆土 茶褐色土（小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P77（第13図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びるものの、凹凸あり。規模 0.42m×0.39m、検出面からの深さは0.08mを測る。覆土 暗褐色土（小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P78（第13図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.30m×0.29m、検出面からの深さは0.09mを測る。覆土 暗褐色土（小振りのロームブロックやや目立つ）の単一層である。

P79（第13図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西－東。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.25m×0.21m、検出面からの深さは0.16mを測る。覆土 暗褐色土（小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P80（第13図）

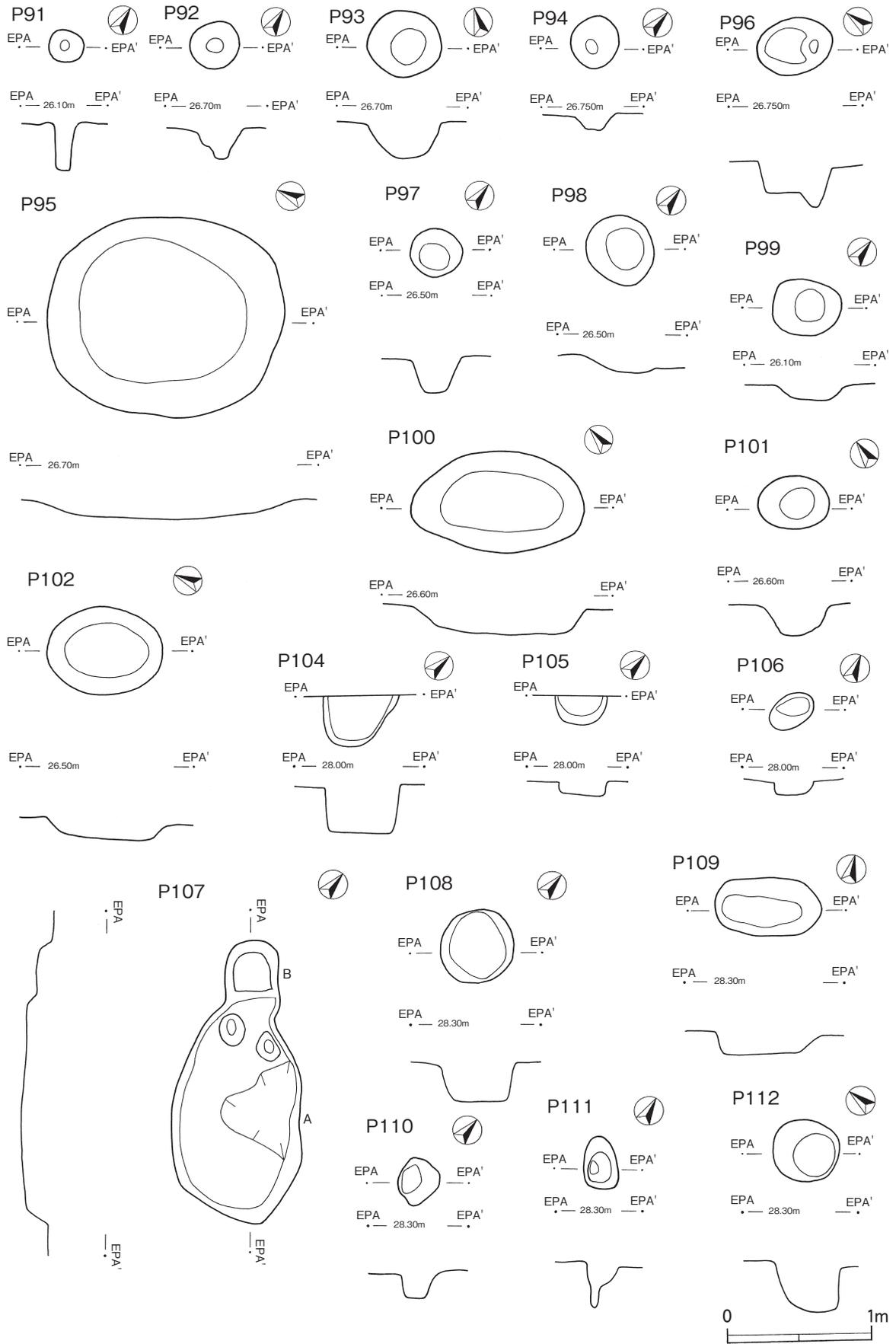
位置 3区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 0.29m×0.28m、検出面からの深さは0.13mを測る。覆土 褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック多量に含む）の単一層である。

P81（第13図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西－東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 南壁は垂直気味で、北壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸あり。規模 0.67m×0.51m、検出面からの深さは0.27mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器1点（浮島・興津）。

P82（第13図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西－東。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸を有しており、中央付近がピット状にくぼむ。横断面形は



第14図 ピット実測図 (5)

浅い「タライ状」となる。規模 1.37m×1.14m、検出面からの深さは0.22mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック少量含む）の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器1点（浮島・興津）、石1点。

P83（第13図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ東北東－西南西。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 南壁は垂直気味で、北壁はゆるやかに立ち上がる。底面はテラスを有する。規模 0.59m×0.39m、検出面からの深さは0.17mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒目立つ）の単一層である。

P84（第13図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西－東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 南壁は垂直気味で、北壁はゆるやかに立ち上がる。底面はテラスを有する。規模 0.52m×0.41m、検出面からの深さは0.26mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロックやや目立つ）の単一層である。

P85（第13図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも不整な円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がる。底面は先すぼまり状であるが、テラス部を有する。規模 0.36m×0.32m、検出面からの深さは0.06mを測る。覆土 褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P86（第13図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西－東。平面形 上部、底部とも不整な円形を呈する。壁・底面 西壁のみゆるやかに立ち上がり、他の壁は垂直気味に立ち上がる。底面は凹凸に富む。規模 0.44m×0.40m、検出面からの深さは0.19mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒含み、小振りのロームブロック少量含む）の単一層である。

P87（第13図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東－南南西。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 1.19m×0.58m、検出面からの深さは0.27mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒含み、小振りのロームブロック目立つ）の単一層である。

P91（第14図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は先すぼまり状となる。規模 0.24m×0.22m、検出面からの深さは0.14mを測る。覆土 暗褐色土（小振りのロームブロック目立つ）の単一層である。

P92（第14図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はやや垂直気味に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.33m×0.33m、検出面からの深さは0.24mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P93（第14図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面はやや凹凸あり。規模 0.38m×0.34m、検出面からの深さは0.11mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒含み、小振りのロームブロックやや目立つ）の単一層。

P94（第14図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・

底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面中央はピット状にくぼむ。規模 0.38m×0.34m、検出面からの深さは0.11mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P 95（第14図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－南南東。平面形 上部、底部とも不整な円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸に富む。規模 1.64m×1.40m、検出面からの深さは0.16mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒少量含み、小振りのロームブロック含む）の単一層である。備考 本跡は「タライ状小竪穴」の形状に近い。

P 96（第14図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－南南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面はテラスを有する。規模 0.54m×0.39m、検出面からの深さは0.32mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器1点（浮島・興津）。

P 97（第14図）

位置 B地区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 0.36m×0.34m、検出面からの深さは0.26mを測る。覆土 茶褐色土（小振りのロームブロックやや目立つ）の単一層。

P 98（第14図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東－南南西。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸あり。北側にテラスを有し、南側のピット部分に向かって傾斜する。規模 0.51m×0.45m、検出面からの深さは0.14mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P 99（第14図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－東南東。平面形 P 98とほぼ同様。壁・底面 P 98とほぼ同様。規模 0.48m×0.39m、検出面からの深さは0.12mを測る。覆土 P 98とほぼ同様。

P 100（第14図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西－南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面はやや凹凸目立つ。規模 1.19m×0.70m、検出面からの深さは0.19mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒含み、小振りのロームブロックやや多量）の単一層。

P 101（第14図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西－南東。平面形 上部、底部とも不整楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面はやや凹凸あり。規模 0.49m×0.38m、検出面からの深さは0.23mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロックやや多量）の単一層である。

P 102（第14図）

位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－南南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は北側にテラスを有する。規模 0.78m×0.62m、検出面からの深さは0.10mを測る。覆土 茶褐色土（小振りのロームブロック、ロームブロック含む）の単一層である。

P 104（第14図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 不明。平面形 上部、底部とも不整円形を呈するか（完掘せず）。壁・底面 壁は垂直に立ち上がるか。底面は凹凸あり、小ピットを有する。規模 (0.54) m × (0.36)

m、検出面からの深さは0.32mを測る。覆土 褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック目立つ）の単一層である。

P105（第14図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 不明。平面形 上部、底部とも円形を呈するか（完掘せず）。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 (0.35) m × (0.19) m、検出面からの深さは0.10mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒含む）の単一層である。

P106（第14図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西-東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 0.32m × 0.22m、検出面からの深さは0.11mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P107A（第14図）

位置 1区。重複関係 P107B号を破壊する。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも不整楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸を有し、小ピット2基あり。規模 1.57m × 0.87m、検出面からの深さは0.42mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P107B（第14図）

位置 1区。重複関係 P107Aの破壊を受ける。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも円形を呈するか。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 (0.46) m × 0.36m、検出面からの深さは0.11mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒含む）の単一層である。

P108（第14図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 0.54m × 0.50m、検出面からの深さは0.26mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む。しまりあり）の単一層である。

P109（第14図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西-東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 南壁は垂直気味で、北壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸少ない。規模 2.42m × 1.40m、検出面からの深さは0.40mを測る。覆土 暗褐色土（小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P110（第14図）

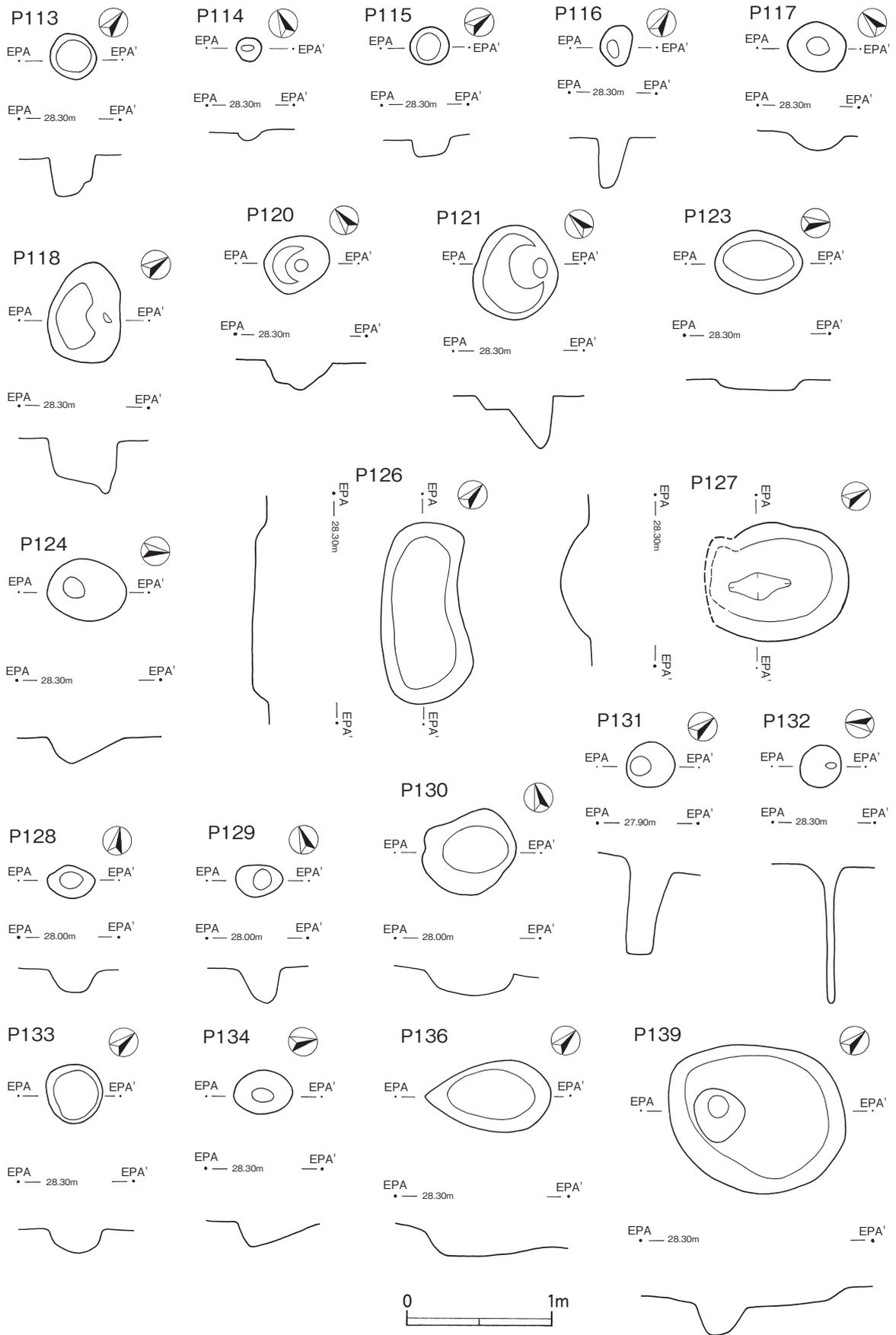
位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも不整な円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸目立つ。規模 0.33m × 0.29m、検出面からの深さは0.19mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック少量含む）の単一層で埋まっていた。

P111（第14図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.37m × 0.23m、検出面からの深さは0.33 mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒少量含む）の単一層である。

P112（第14図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸やや目立つ。規模 2.42m × 1.40m、検出面からの深さは0.40mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロックやや目立つ）の単一層。



第15図 ピット実測図 (6)

P 113 (第15図)

位置 1区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも不整楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 0.34m×0.30m、検出面からの深さは0.26mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P 114 (第15図)

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－南南東。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は先すぼまり状となる。規模 0.19m×0.16m、検出面からの深さは0.06 mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層。

P 115 (第15図)

位置 1区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味で立ち上がり、底面はやや凹凸あり。規模 0.27m×0.26m、検出面からの深さは0.14mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P 116 (第15図)

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－南南東。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.29m×0.22m、検出面からの深さは0.36mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック少量含む）の単一層である。

P 117 (第15図)

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西－南東。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.40m×0.35m、検出面からの深さは0.12mを測る。覆土 暗褐色土（小振りのロームブロック少量含む）の単一層である。

P 118 (第15図)

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－南南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 東壁は垂直気味で、西壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸があり、ピット状にくぼむ。規模 0.70m×0.51m、検出面からの深さは0.39mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック、ロームブロック含む）の単一層である。

P 120 (第15図)

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西－南東。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 南壁は垂直気味に立ち上がり、北壁は斜傾する。規模 0.45m×0.38m、検出面からの深さは0.15mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒少量含む）の単一層である。

P 121 (第15図)

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－南南東。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸があり、テラスとピットを有する。規模 0.65m×0.57 m、検出面からの深さは0.37mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P 123 (第15図)

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北－南。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.61m×0.44m、検出面からの深さは0.08mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P 124 (第15図)

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北－南。平面形 上部、底部とも不整円形を呈する。壁・

底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は一端に深さが偏る。規模 0.54m×0.44m、検出面からの深さは0.20mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P 126（第15図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－南南東。平面形 上部、底部ともに不整な楕円形（しいて例えれば糸瓜形）を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸を有するが、丸みを帯びる。規模 1.25m×0.60m、検出面からの深さは0.15mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P 127（第15図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ東北東－西南西。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸目立つ。規模 0.98m×0.82m、検出面からの深さは0.28mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック少量含む）の単一層である。

P 128（第15図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西－東。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.33m×0.22m、検出面からの深さは0.14mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P 130（第15図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西－東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面はやや凹凸を有するが、北側にテラスを有し、南側のピット部分に向かって傾斜する。規模 2.42m×1.40m、検出面からの深さは0.40mを測る。覆土 5層に分層でき、3層までが黒色土主体で、壁際及び最下層は暗褐色土系。全て自然堆積である。

P 131（第15図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味立ち上がり、底面は先すぼまり状になる。規模 0.33m×0.33m、検出面からの深さは0.58mを測る。覆土 黒褐色土（ローム粒少量含む）の単一層である。

P 132（第15図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は先すぼまり状になる。規模 0.30m×0.26m、検出面からの深さは0.97mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック少量含む）の単一層である。備考 本跡は木根の攪乱があるため、深度は参考程度にさせていただきたい。

P 133（第15図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.42m×0.38m、検出面からの深さは0.17mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P 134（第15図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北－南。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.40m×0.30m、検出面からの深さは0.44mを測る。覆土 暗褐色土（小振りのロームブロック目立つ）の単一層。

P 136（第15図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ東北東－西南西。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.87m×0.50m、検出面からの深

さは0.07mを測る。覆土 褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック目立つ）の単一層である。

P137（第15図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西－東南東。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸が少なく、ピットを有する。規模 1.27m×1.04m、検出面からの深さは0.29mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロックやや目立つ）の単一層である。

P139（第16図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西－東南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 北壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模 0.62m×0.51m、検出面からの深さは0.07mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P141（第16図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－南南東。平面形 上部、底部とも不整形円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.54m×0.48m、検出面からの深さは0.25mを測る。覆土 黒褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック少量含む）の単一層。

P143（第16図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がる。底面は凹凸を有し、中央部は小ピット状となる。規模 0.43m×0.42m、検出面からの深さは0.23mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック少量含む）の単一層である。

P144（第16図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ東北東－西南西。平面形 上部、底部とも長楕円形を呈する。壁・底面 西壁は垂直気味で、東壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸あり。規模 1.45m×0.58m、検出面からの深さは0.09mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒含み、小振りのロームブロックやや目立つ）の単一層である。

P145（第16図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面にピットを有する。規模 0.39m×0.38m、検出面からの深さは0.11mを測る。覆土 暗褐色土（小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P146（第16図）

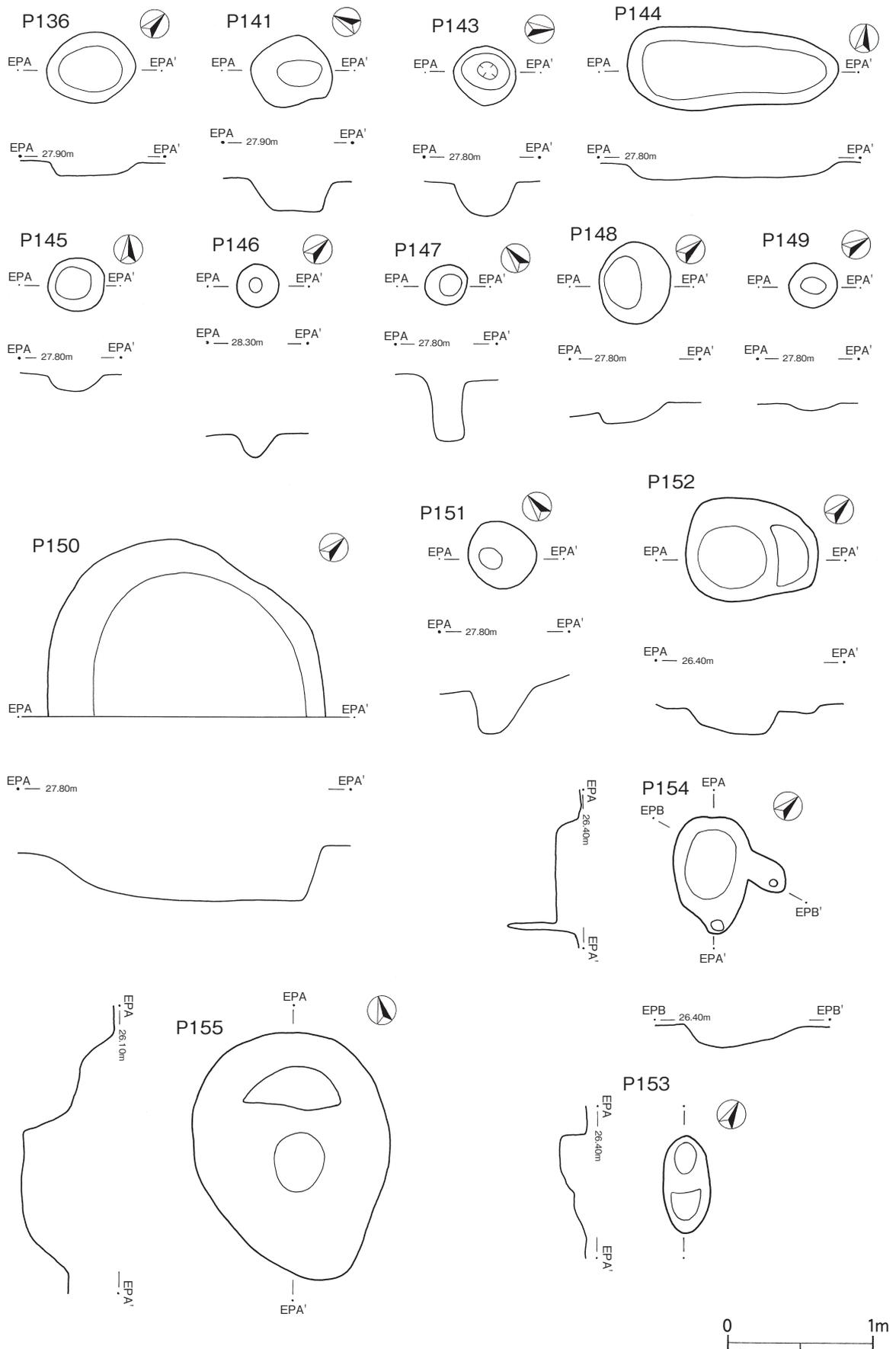
位置 1区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸底状となる。規模 0.30m×0.29m、検出面からの深さは0.18mを測る。覆土 暗褐色土（小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P147（第16図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は先すぼまり状となる。規模 0.28m×0.28m、検出面からの深さは0.44mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロックやや目立つ）の単一層。

P148（第16図）

位置 1区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－南南東。平面形 上部、底部とも略円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 0.58m×0.48m、検出面からの深さは0.14mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒目立ち、小振りのロームブロック含む）の単一層である。



第16図 ピット実測図 (7)

P 150 (第16図)

位置 1区。重複関係 単独。長軸 不明(完掘していないため)。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 1.92m×(1.23)m、検出面からの深さは0.37mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック少量含む)の単一層である。備考 本跡は「タライ状小竪穴」的な形状である。

P 151 (第16図)

位置 1区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも略円形を呈する。壁・底面 壁は一方向に傾斜する。底面に「あたり」あり。規模 2.42m×1.40m、検出面からの深さは0.40mを測る。覆土 茶褐色土(ローム粒含み、小振りのロームブロック少量含む)の単一層。備考 本跡は柱穴状のピットと思われる。

P 152 (第16図)

位置 3区。重複関係 D1を破壊する。長軸 ほぼ東北東-西南西。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は北側にテラスを有する。規模 0.69m×0.34m、検出面からの深さは0.19mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む)の単一層である。

P 153 (第16図)

位置 3区。重複関係 D1を破壊する。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は北側にテラスを有する。規模 0.69m×0.34m、検出面からの深さは0.19mを測る。覆土 茶褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む)の単一層である。

P 154 (第16図)

位置 3区。重複関係 D1を破壊する。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも不整楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がる。底面は北側にテラスを有するものと、ピット状になるものがある。規模 0.80m×0.53m、検出面からの深さは0.17mを測る。覆土 暗褐色土(小振りのロームブロック含む)の単一層である。遺物 出土総数は縄文式土器1点(浮島・興津)。備考 本跡は複数のピットの集合体と思われる。

P 155 (第16図)

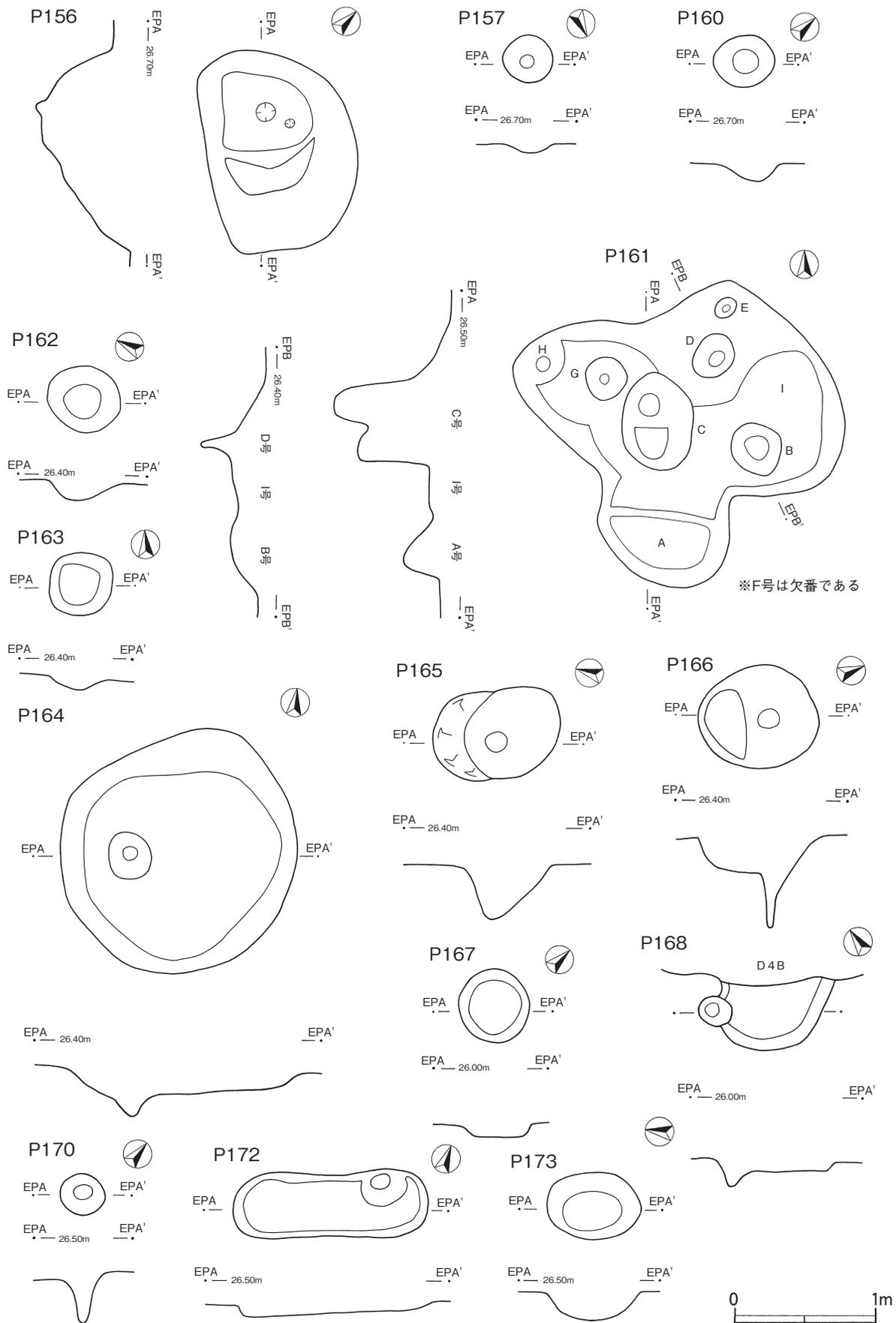
位置 3区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 上部、底部とも不整楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面はテラスを有し、凹凸あり。規模 1.74m×1.35m、検出面からの深さは0.62mを測る。覆土 大略2層に分層でき、上層が黒褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む)、下層は褐色土(ロームブロック含む)。

P 156 (第17図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも不整な円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸目立つ。規模 1.47m×1.04m、検出面からの深さは0.68mを測る。覆土 暗褐色土(小振りのロームブロック含む)の単一層。遺物 出土総数は縄文式土器1点(条痕文)。

P 157 (第17図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.34m×0.33m、検出面からの深さは0.07mを測る。覆土 茶褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む)の単一層で埋まっている。



第17図 ピット実測図 (8)

備考 P175～P194の覆土と近似する。

P160 (第17図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.43m×0.37m、検出面からの深さは0.13mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層。遺物 出土総数は縄文式土器1点（条痕文）。備考 P175～P194の覆土と近似する。

P161 (第17図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西-東。平面形 上部、底部とも不整形（アメーバ状）を呈する。壁・底面 壁はB号～H号が垂直気味で、A号、I号はゆるやかに立ち上がる。底面はA号、I号はやや凹凸あり。規模 2.36m×2.20m、検出面からの深さは0.61mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック、ロームブロック含む）の単一層。遺物 出土総数は縄文式土器5点（条痕文2、浮島・興津3）。備考 本跡は2基の楕円形土坑（A号、I号）と7基の柱穴上ピット（B号～H号）の集合体である。A号はI号を切り、B号、H号、G号もI号を切る。I号はC号～E号を貼っている。以上から、C号～E号→I号→A号→B号、H号、G号という新旧関係が想定される。

P162 (第17図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上が底面は丸みを帯びる。規模 0.52m×0.46m、検出面からの深さは0.14mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。備考 P175～P194の覆土と近似する。

P163 (第17図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は皿状を呈する。規模 0.49m×0.47m、検出面からの深さは0.07mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層。遺物 出土総数は縄文式土器1点（浮島・興津）。備考 P175～P194の覆土と近似する。

P164 (第17図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西-東。平面形 上部、底部とも略円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸に富み、ピット状にくぼむ。規模 2.42m×1.40m、検出面からの深さは0.40mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック、ロームブロック含む）の単一層。遺物 出土総数は縄文式土器4点（条痕文2、浮島・興津1、加曾利E式1）。

P165 (第17図)

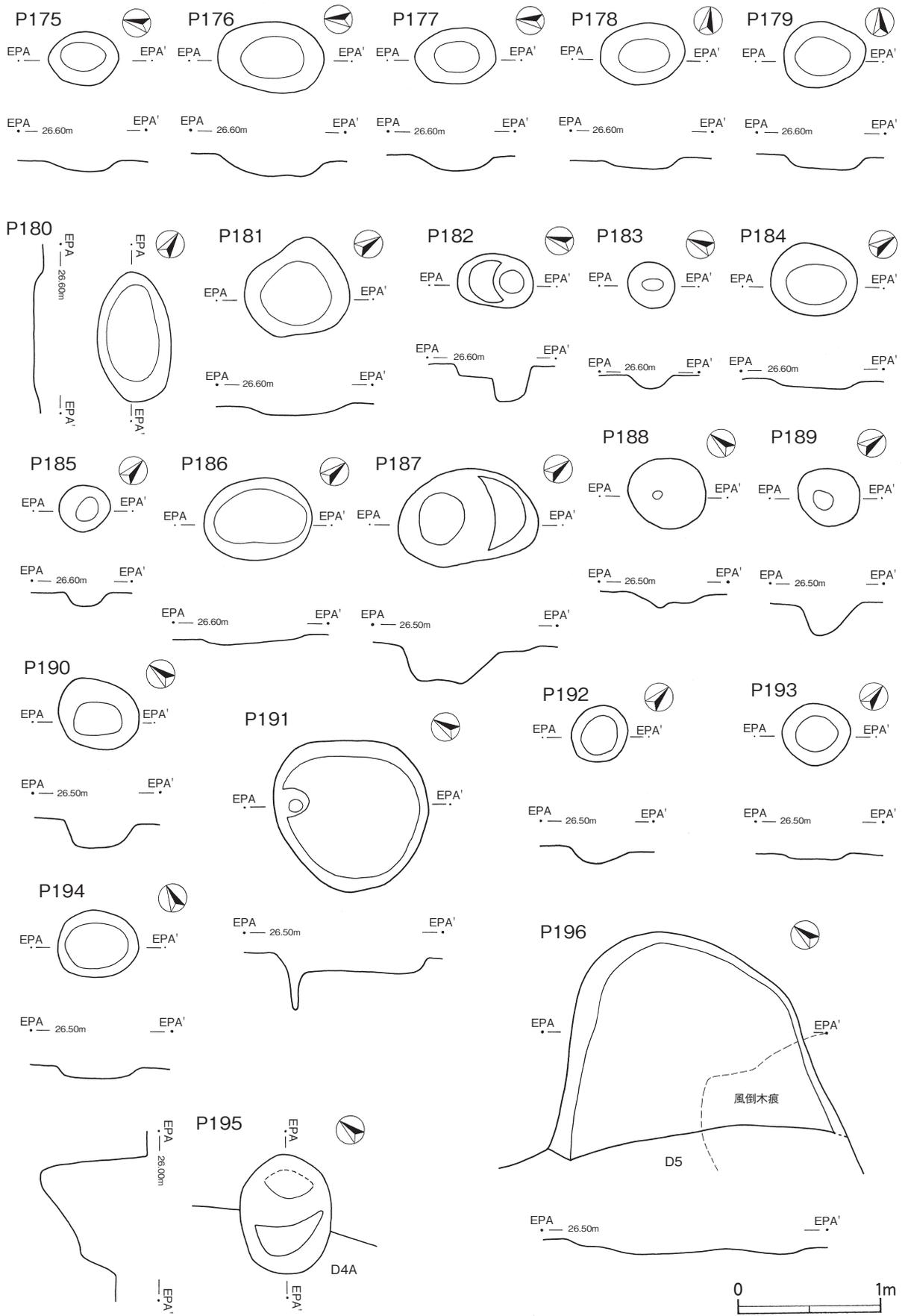
位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面はテラスを有し、一端がピット状となる。規模 0.92m×0.63m、検出面からの深さは0.35mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロックやや目立つ）の単一層である。

P166 (第17図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は先すぼまり状となる。規模 0.85m×0.74m、検出面からの深さは0.65mを測る。覆土 暗褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P167 (第17図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部、底部とも不整楕円形を呈する。



第18図 ピット実測図 (9)

壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸目立つ。規模 0.52m×0.47m、検出面からの深さは0.09mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P 168（第17図）

位置 4区。重複関係 D 4 Bの破壊を受ける。長軸 不明。平面形 上部、底部とも楕円形か。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は比較的平坦。規模 0.85m×(0.45)m、検出面からの深さは0.09mを測る。覆土 暗褐色土（小振りのロームブロック含む）の単一層である。備考 小ピット（深さ0.21m）は別物の可能性がある。

P 170（第17図）

位置 4区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.32m×0.29m、検出面からの深さは0.36mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P 172（第17図）

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ東北東－西南西。平面形 上部、底部とも長楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は比較的平坦で、ピットを1基有する。規模 1.37m×0.49m、検出面からの深さは0.25mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P 173（第17図）

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北－南。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.66m×0.48m、検出面からの深さは0.20mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層である。

P 175（第18図）

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－南南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は皿状を呈する。規模 0.50m×0.38m、検出面からの深さは0.08mを測る。覆土 茶褐色土（ローム粒、小振りのロームブロック含む）の単一層。備考 本跡と覆土が近似する土坑が、4区内にはかなり存在する。

P 176（第18図）

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北－南。平面形 形状はP 175とほぼ同様。壁・底面 P 175とほぼ同様。規模 0.75m×0.51m、検出面からの深さは0.14mを測る。覆土 P 175とほぼ同様。

P 177（第18図）

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北－南。平面形 形状はP 175とほぼ同様。壁・底面 P 175とほぼ同様。規模 0.57m×0.39m、検出面からの深さは0.10mを測る。覆土 P 175とほぼ同様。

P 178（第18図）

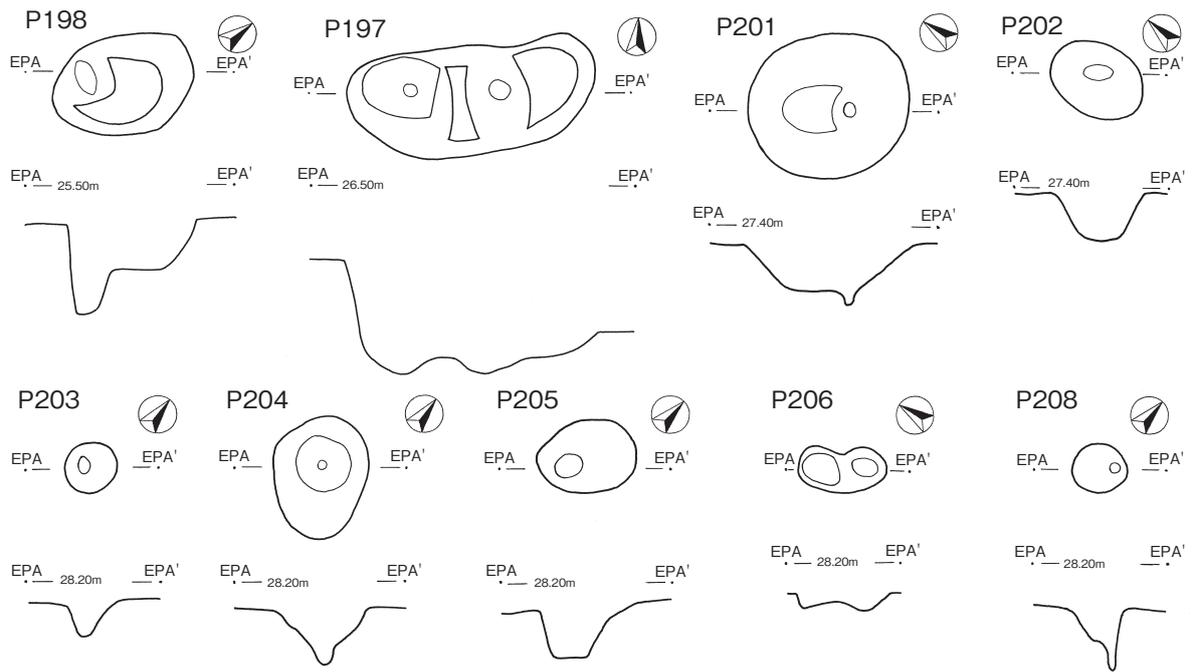
位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西－東。平面形 形状はP 175とほぼ同様。壁・底面 P 175とほぼ同様。規模 0.59m×0.44m、検出面からの深さは0.08mを測る。覆土 P 175とほぼ同様。

P 179（第18図）

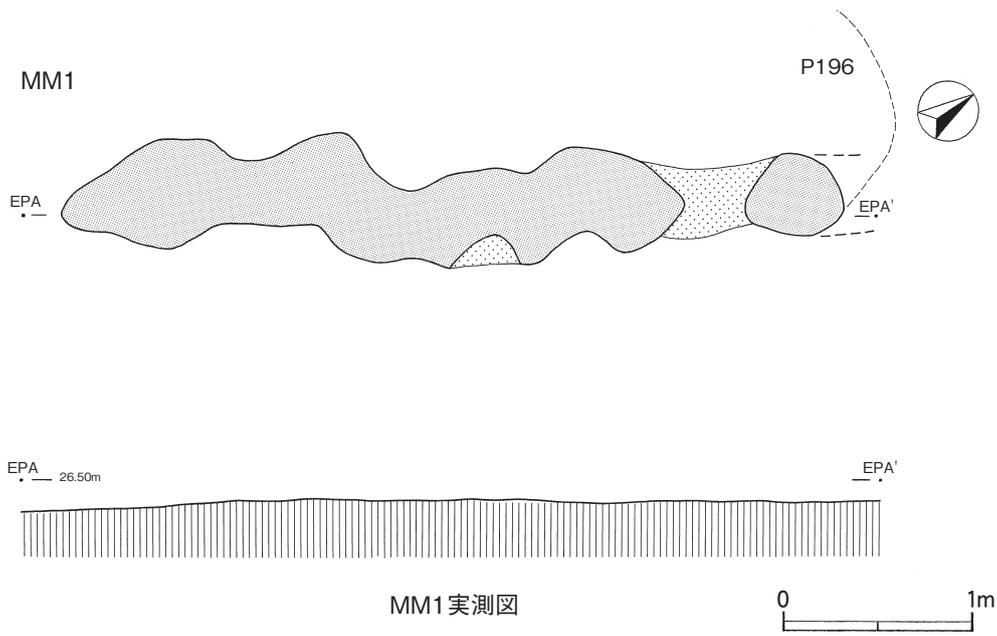
位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西北西－東南東。平面形 形状はP 175とほぼ同様。壁・底面 P 175とほぼ同様。規模 0.49m×0.46m、検出面からの深さは0.10mを測る。覆土 P 175とほぼ同様。

P 180（第18図）

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－南南東。平面形 形状はP 175とほぼ同様。壁・

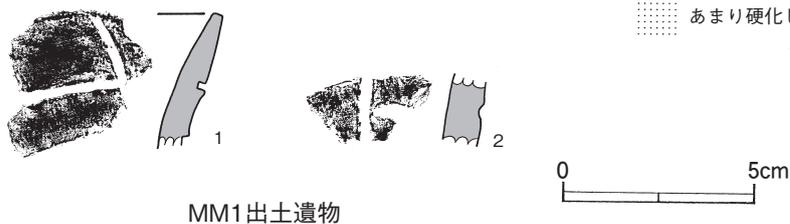


ピット実測図



MM1実測図

 硬化している部分
 あまり硬化していない部分



MM1出土遺物

第19図 ピット実測図 (10) ・MM1実測図

底面 P175とほぼ同様。規模 0.92m×0.51m、検出面からの深さは0.08mを測る。覆土 P175とほぼ同様。

P181 (第18図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 形状はP175とほぼ同様。壁・底面 P175とほぼ同様。規模 0.75m×0.64m、検出面からの深さは0.12mを測る。覆土 P175とほぼ同様。

P182 (第18図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は比較的ゆるやかに立ち上がる。底面はテラスを有し、一端がピット状となる。規模 0.55m×0.39m、検出面からの深さは0.26mを測る。覆土 P175とほぼ同様。

P183 (第18図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は比較的ゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.34m×0.32m、検出面からの深さは0.08mを測る。覆土 P175とほぼ同様。

P184 (第18図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.61m×0.50m、検出面からの深さは0.07mを測る。覆土 P175とほぼ同様。

P185 (第18図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.34m×0.33m、検出面からの深さは0.09mを測る。覆土 P175とほぼ同様。

P186 (第18図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部、底部とも不整円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.76m×0.56m、検出面からの深さは0.09mを測る。覆土 P175とほぼ同様。

P187 (第18図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ東北東-西南西。平面形 上部、底部とも卵形に近い円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面はテラスを有する。規模 0.99m×0.66m、検出面からの深さは0.31mを測る。覆土 P175とほぼ同様であるが、小振りのロームブロックが多い。

P188 (第18図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも不整な円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸あり。規模 0.55m×0.50m、検出面からの深さは0.14mを測る。覆土 P175とほぼ同様。

P189 (第18図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも略円形を呈する。壁・底面 南壁は垂直気味で、北壁はゆるやかに立ち上がる。底面は北側にテラスを有する。規模 0.45m×0.40m、検出面からの深さは0.24mを測る。覆土 P175とほぼ同様。

P190 (第18図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部ともやや不整な円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.59m×0.48m、検

出面からの深さは0.21mを測る。覆土 P175とほぼ同様。

P191 (第18図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は皿状となる。規模 1.14m×1.05m、検出面からの深さは0.42mを測る。覆土 P175とほぼ同様。

P192 (第18図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.42m×0.37m、検出面からの深さは0.08mを測る。覆土 P175とほぼ同様。

P193 (第18図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.49m×0.44m、検出面からの深さは0.03mを測る。覆土 P175とほぼ同様。

P194 (第18図)

位置 4区。重複関係 単独。長軸 ほぼ西-東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は概ね平坦。規模 0.58m×0.47m、検出面からの深さは0.10mを測る。覆土 P175とほぼ同様。

P195 (第18図)

位置 4区。重複関係 風倒木痕を破壊し、D4Aの破壊を受ける。長軸 ほぼ東北東-西南西。平面形 上部、底部とも略楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は丸みを帯び、テラスを有する。規模 0.85m×0.63m、検出面からの深さは0.73mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む)の単一層。遺物 出土総数は縄文式土器2点(黒浜2)。

P196 (第18図)

位置 4区。重複関係 D5、MM1に破壊される。長軸 ほぼ東北東-西南西。平面形 上部、底部とも不整円形を呈するか(半分以上を欠失するため不明)。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は概ね平坦。規模 (2.21)m×(1.45)m、検出面からの深さは0.15mを測る。覆土 茶褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック、ロームブロック含む)の単一層である。

P197 (第19図)

位置 4区。重複関係 P169の破壊を受ける。長軸 ほぼ東北東-西南西。平面形 上部、底部とも不整な楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面はセパレーション状のテラスをはさみ、略三段状となる。規模 2.42m×1.40m、検出面からの深さは0.40mを測る。覆土 茶褐色土系の単一層である。

P198 (第19図)

位置 4区。重複関係 P169を破壊する。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部、底部とも不整な楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がる。底面はテラスを有し、一端がピット部分くぼむ。規模 0.74m×(0.52)m、検出面からの深さは0.50mを測る。覆土 茶褐色土系の単一層。

P201 (第19図)

位置 5区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面はテラスを有し、一端にピットあり。規模 0.87m×0.76m、検出面からの深さは0.20mを測る。覆土 大略2層に分層でき、上層が暗褐色土(ローム粒、小振

りのロームブロック含む)、下層は茶褐色土(小振りのロームブロック多量に含み、しまりに富む)。

P202 (第19図)

位置 5区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は先すぼまり状となる。規模 0.49m×0.38m、検出面からの深さは0.26mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック少量含む)の単一層。

P203 (第19図)

位置 6区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.29m×0.27m、検出面からの深さは0.19mを測る。覆土 褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック目立つ)の単一層である。

P204 (第19図)

位置 6区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸を有し、ピット状にくぼむ。規模 0.65m×0.39m、検出面からの深さは0.34mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック少量含む)の単一層である。

P205 (第19図)

位置 6区。重複関係 単独。長軸 ほぼ東北東-西南西。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁は一方に向かって傾斜しており、底面は先すぼまり状。規模 0.55m×0.39m、検出面からの深さは0.29mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む)の単一層。

P206 (第19図)

位置 6区。重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも楕円形を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯び、テラスを有する。規模 0.47m×0.23m、検出面からの深さは0.11mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック目立つ)の単一層である。

P208 (第19図)

位置 6区。重複関係 単独。長軸 円形なのでなし。平面形 上部、底部とも略円形を呈する。壁・底面 壁は垂直気味に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.30m×0.26m、検出面からの深さは0.37mを測る。覆土 暗褐色土(ローム粒、小振りのロームブロック含む)の単一層である。

(5) 道路状遺構 (第19図)

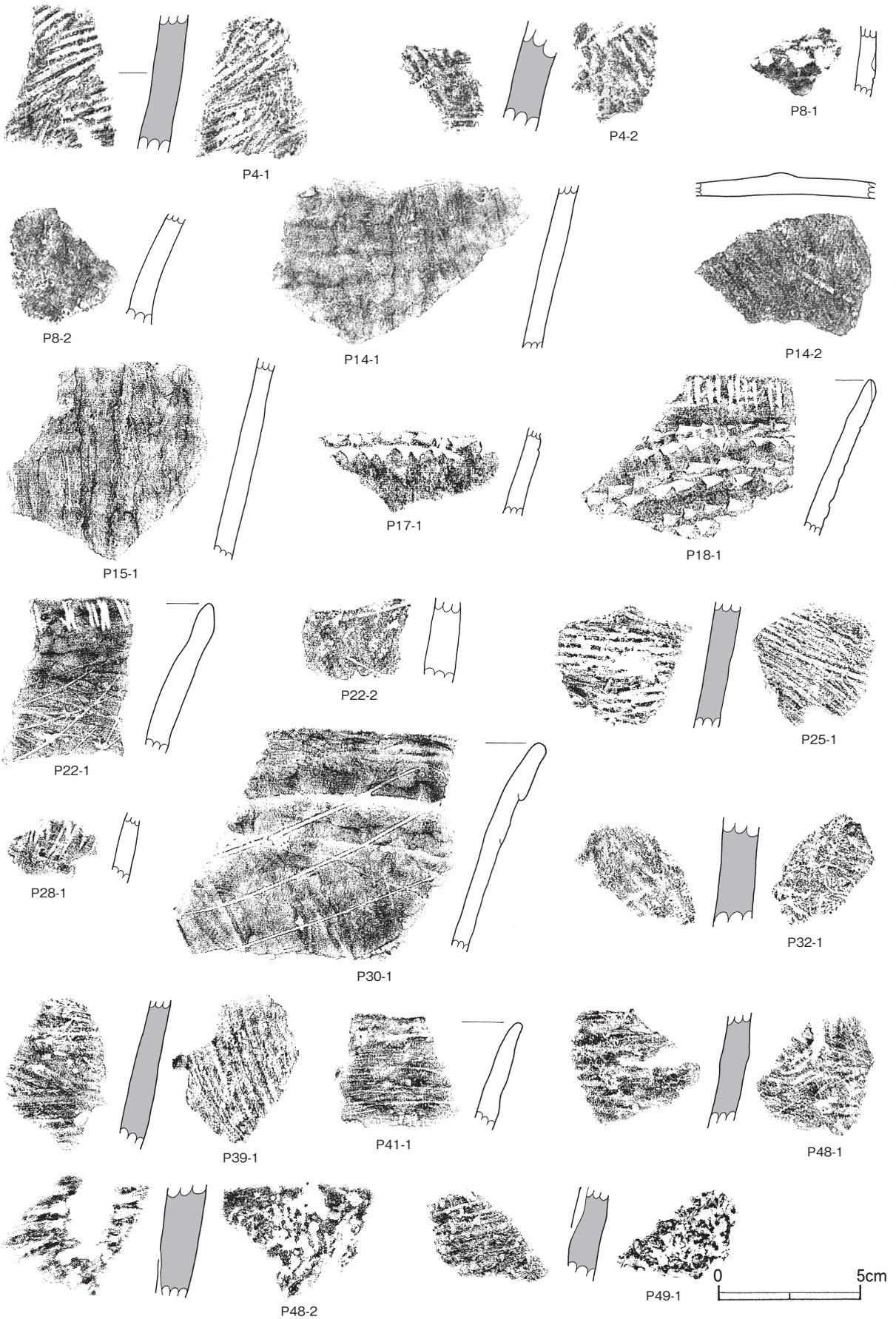
MM1 (第19図)

位置 4区。重複関係 D5、P196及び風倒木痕を破壊し、その南端はD4Aの破壊を受ける。平面形 路線自体は大略直線状であるが、路面の形状はやや不整形を呈する。規模 総延長4.18m、最大幅0.55m。路面 暗褐色土層中に、ロームブロック、ローム質土を多量に混じる褐色土を敷く、ないしは盛ることによって構築されている。遺構確認の時点で、一連の硬化面として検出された。硬化面自体の凹凸は、比較的少ない。覆土 掘り込み、掘り方は検出されておらず、残存部分での覆土は認められなかった。遺物出土状態 硬化面を除去する際に土器小片が出土した。備考 硬化面除去作業中の土器出土状況から、硬化面は複数面存在した可能性がある。本跡の「MM」とは「ムラ道」を略したもの。

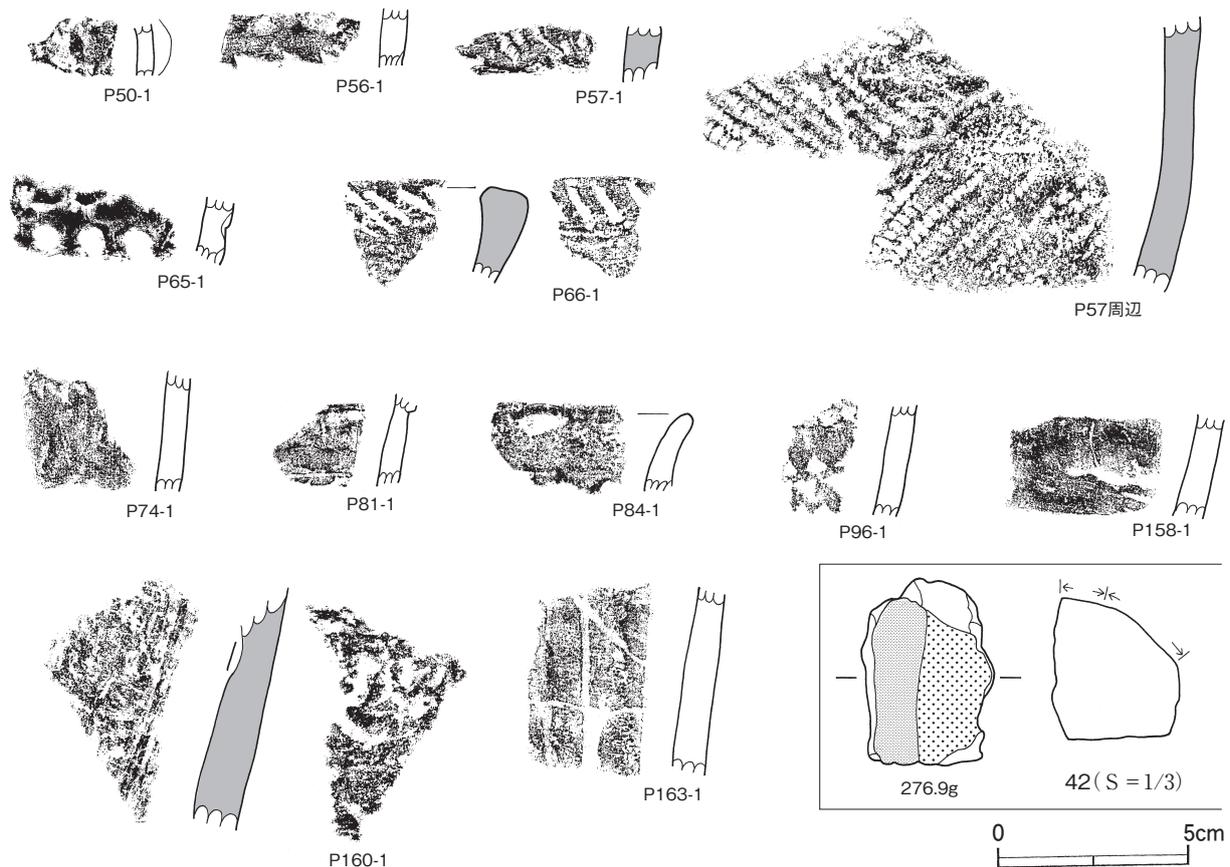
出土遺物 (第19図)

出土総数は縄文式土器5点(黒浜式)。

1は口縁片。沈線で格子目文を描く。2は同一個体と思われ、沈線による意匠ないし装飾を施す。



第20図 ピット出土遺物 (1)



第21図 ピット出土遺物 (2)

(6) ピット出土遺物 (第20図・P 6は第10図・P 49-2は第12図)

- P 4 1・2はフネガイ科の貝殻を施文原体として用い、内外面とも貝殻条痕を施した胴部片。
- P 6 1はいわゆる「下堤型」の土製球状耳飾片。素文で、浮島・興津式土器の胎土に近似する。
- P 8 1は三角文を横位に施文する。2は内外面とも調整痕のみで、外面はケズリのちミガキを入れる。
- P14 1は内外面とも調整痕のみで、外面はケズリのちミガキを入れる。2は底部片。
- P15 1は内外面とも調整痕のみで、外面はケズリのち部分的にミガキを入れる。内面にオコゲ付着。
- P17 1は三角文を横位に重畳施文した胴部片である。浮島Ⅲ式ないしは興津Ⅰ式土器。
- P18 1は口縁部片。口縁部文様帯は、縦位に密接施文した条線帯で、その下に三角文を横位に重畳施文する。これら全ての施文前に、器面調整としてケズリを施す。興津Ⅰ式土器である。
- P22 1は口縁部片。口縁部文様帯は、縦位に比較的密接施文した条線帯で、その下はややランダムな斜沈線を施す。興津Ⅰ式土器。2は胴部片。ケズリのちナデつけを行い、この後沈線を施文す。
- P25 1はフネガイ科の貝殻を施文原体として用い、内外面とも貝殻条痕を施した胴部片。
- P28 1は横位にごく浅い波状貝殻文を施文した胴部片で、施文原体はハマグリである。
- P30 1は平縁かつ複合口縁。器面調整としてケズリのち部分的にミガキを施し、この後細くシャープな斜沈線を施文するものである。興津式土器の範疇で捉えられよう。
- P32 1はフネガイ科の貝殻で、内外面とも貝殻条痕を施した胴部片。内面はナデつけを施す。
- P39 1はフネガイ科の貝殻で、内外面とも貝殻条痕を施した胴部片。内面はナデつけを施す。
- P41 1は口縁片で、平縁かつ単口縁。細沈線をやや密かつランダムに施す。
- P48 1・2はフネガイ科の貝殻を施文原体として用い、内外面とも貝殻条痕を施した胴部片。
- P49 1はフネガイ科の貝殻を施文原体として用い、内外面とも貝殻条痕を施した胴部片。2は敲石。

破損ないしは損壊した礫の破損面を使用面としており、広義の「再生器具」である。砂岩製。

P50 1は文様の起点として、小豆大の粘土瘤を貼付した胴部片。胎土・焼成から見て、加曾利B3式ないしは曾谷式土器に比定される。器形的には、所謂「瓢形土器」の類に相当しよう。

P56 1は三角文を横位に施文した胴部片である。浮島・興津式。

P57 1は1段Rを地文とする胴部片。周辺資料は、附加条縄文を羽状施文した胴部片である。

P65 1は凹凸文を横位に重畳施文した口辺部片。浮島・興津式。

P66 1は口縁片で、やや内厚気味。口唇上に短沈線で装飾を施し、器面調整は内外面とも貝殻条痕。

P74 1は器面調整痕のみの胴部片。浮島・興津式。

P81 1は横位に細沈線を施した胴部片である。

P82 1は口縁片。平縁で、凹凸文を施文したもの。浮島・興津式。

P96 1は三角文を横位に重畳施文した胴部片である。浮島Ⅲ式ないしは興津Ⅰ式土器。

P158 1は器面調整痕のみの胴部片。浮島・興津式。

P160 1はフネガイ科の貝殻を施文原体として用い、内外面とも貝殻条痕を施した胴部片。

P163 1はスパンの空いた単沈線を、縦位に施文した胴部片。浮島・興津式。

(7) 調査区出土遺物 (第22図・石器のみ第21図)

遺構外の遺物と表面採集資料を含む。縄文式土器209点(撚糸文系1点、条痕文系83点、黒浜式42点、浮島・興津式64点、諸磯式3点、前期末葉～中期初頭1点、加曾利E式1点、加曾利B式9点、曾谷式2点、後期安行式2点、晩期安行式1点、)、石器1点(敲石)、礫24点。この他土師器1点。

縄文式土器

1は撚糸文系土器。条間の疎な撚糸Rを縦位施文した胴部片。稲荷台式土器である。

2～11は条痕文系土器。2は口唇部を若干ひだ状にする。スパンの空いた浅い押引文を施文。3・4は小波状縁で、口唇上にキザミを施す。4・5・8・9は多截竹管による刺突文を施すもの。7は外面に地文として縄文1段Rを施文し、内面は貝殻条痕を施したもの。これらは、茅山上層式土器に比定されよう。

12～22は黒浜式土器。12～14は竹管の内側を用いて平行沈線を施文する。12・13は口縁片で、口唇部形態は角頭状を呈する。17～22は地文部分で、使用原体は17～20は撚糸R、21・22は2段RL。

23～31は浮島・興津式土器。平行沈線を施文する23は浮島Ⅰ式、垂直施文の貝殻文の30が興津Ⅰ式に比定されよう。なお、4区一括とした30は、D6出土遺物の第7図2～6と同一個体である。

32・33は諸磯式土器。いずれも諸磯b式土器の沈線文系土器で、無文地の資料。

34は前期末葉～中期初頭の縄文系粗製土器。地文として2段RLを施した胴部片である。

35は加曾利E式土器。地文として2段RLを斜回転施文した胴部片で、細別型式は不明。

36・37は加曾利B式土器。ともに精製土器。36は浅鉢形土器の口縁片で、加曾利B3式土器。

38・39は曾谷式土器。38は精製の平縁深鉢形土器。口縁部文様帯は3本の沈線で画し、上段は縄文、下段にはキザミを施し、上下段の間は「削り取り手法」により無文帯とする。これらをまたぐように縦位の貼瘤を施し、これを起点に頸部文様帯は磨消弧線文を施文するものである。典型的な資料。

40・41は後期安行式土器の紐線文系粗製土器。40の施文工程は条線→紐線貼付→紐線上の連続押捺。

石器

第21図は広義の敲石と思われる。磨石が欠損した後の「再生器具」である。そのため、磨石本来の磨れ面と、再生後の敲打面の、二面の使用面が認められる。遺構外出土遺物のうち、確実に石器として認定できるのはこの1点のみ。通時的に見て、遺構出土を含めても非常に貧弱な石器組成と言えよう。

第3章 成果と課題

紙数の都合もあり、ごく簡潔に記すことにしたい。なお、参考文献は割愛させていただく。

1. 遺構の垂直分布から見た土地利用状況

今回の調査では、2区を除く各調査区から遺構が検出された。このうち、竪穴住居跡及び炉穴は3区と4区でのみ検出されたものである。これらの分布状況には一つの法則性が認められた。それは即ち、花輪谷津に臨む緩斜面の標高26m～27mのエリアに、帯状に分布するのである。この点は、隣接するa地点の調査時から注意されていたことで、本遺跡の特徴といえる。少なくとも、縄文早期後半～前期後半における、居住域を中心とした狭義の「環境開発圏」は、標高に強く影響されていたと指摘できる。

他方で、1区を中心とする、台地上平坦部を含む標高28mあたりでは、陥穴に見られる「狩猟域」として機能していただけでなく、縄文後期後半の土器の検出から、前者とは異なる土地利用が認められた。

2. 縄文早期後半の集落

竪穴住居跡3軒（D4B・D5と、やや根拠に乏しいもののP29を含む）、炉穴5基（P5・55・158・159・171）ピット12基（P4・23・25・31・32・37・38・48・49・160・175）が検出された。

竪穴住居跡は、平面形が楕円形で、構造的には長軸上に主柱穴を2本穿ち、これに壁柱穴ないしは補助柱穴を穿つもので、いずれも屋内炉は検出されなかった。屋外調理施設である炉穴との位置関係は、D5とP171が2.5mと比較的近いが、D4BとP158・159とは20m程離れており、P29はP5とP55との間には10m程の距離がある。総じて、炉穴と住居跡の相関関係は、単純ではないと言えよう。

集落の時期は、遺跡全体の条痕文系土器を瞥見する限り、茅山上層式土器でほぼ占められることから、同期の所産として捉えたい。ちなみに、a地点における炉穴群の時期も、茅山上層式期であった。

3. 縄文前期前半の集落

竪穴住居跡1軒（P169）、ピット2基（P57・195）、道路状遺構1条（MM1）が検出された。

竪穴住居跡は、長楕円形かつ2本主柱で、屋内炉が検出されなかった。a地点における焼礫の集積に見られるように、少なくとも季節的には屋外調理がメインであったことを、十分に考慮する必要がある。

道路状遺構は、土を盛る、ないし敷くという土木工事を行っており、ある程度恒常的か、長期にわたっての使用を前提としたものと思われる。察するに、本遺跡近隣の大集落であるところの、仲ノ台遺跡（ムラ）などが、吉橋支台（ヤマ）を生業のための用益空間として、ある程度恒常的に使用するために、道路を敷設した可能性が高い。換言すれば、インフラストラクチャーの整備である。

集落の時期は、黒浜式期でも古手に位置づけられ、仲ノ台遺跡とほぼオーバーラップする。

4. 縄文前期後半の集落

竪穴住居跡4軒（D1・D2・D4A・D6）、ピット17基（P6・8・10・11・14・15・22・27・28・30・33・44・65・67・74・81・82・152・153・154・161・163）が検出された。

竪穴住居跡は、方形基調かつ2本主柱のもの（D1・D4A）と、円形基調かつ4本主柱のもの（D6）があり、ともに屋内炉は検出されなかった。D1→D2、D4A→D6という住まいの流れがある。

ピットは常松成人氏命名による「凹み状土坑」が主体となり、これに浅いタライ状のもの（P65・82）などが加わる。P6からはいわゆる「下堤型」の土製球状耳飾が出土しており、注目される。

集落の時期は、住居跡出土遺物が比較的少なく、かつ床面密着資料ではないため、断言は控えたいが、D1・D4Aが浮島Ⅲ式期、D2・D6が興津Ⅰ式期に比定される。相伴した諸磯b式土器は、無文地の沈線文系で、中段階の新しい部分から新段階にかけての資料である。以上、甚だ拙いが結びとしたい。

報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよし うちのみなみいせきでいーちてん はくつちょうさほうこくしょ
書名	千葉県八千代市内野南遺跡d地点発掘調査報告書
副書名	集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
編集者名	森 竜哉 中野修秀
編集機関	八千代市教育委員会
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 ☎047(483)1151 代表
発行年月日	2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うちのみなみ 内野南遺跡 d地点	やちよしよしほしあざ 八千代市吉橋字 うちの 内野1058番1	12221	289	35度 43分 44秒	140度 4分 46秒	20071126 ～ 20080118	1,600㎡	集合住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
内野南遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡8軒 炉穴5基 陥穴1基 土坑182基 道路状遺構1条	縄文土器(条痕文, 黒浜式, 浮島式, 興津式, 諸磯B式, 加曾利B式, 曾谷式, 後期安行式, 晩期安行式) 石器(磨石, 敲石)	縄文前期前半黒浜式期の道路状遺構検出した

要約	<p>今回の調査で、縄文時代早期後半から前期後半にいたる集落跡が検出された。検出された遺構の総数は、竪穴住居跡8軒、炉穴5基、陥穴1基、ピット182基である。</p> <p>出土遺物は、縄文式土器、石器及び焼礫である。その他では、表面採集での土師器1点が、唯一の縄文時代以外の遺物となっている。縄文式土器は早期から晩期に及んでいる。時期を古い順に羅列すると、稲荷台式、茅山上層式、黒浜式、浮島式、興津式、諸磯b式、前期末葉～中期初頭、加曾利E式、加曾利B式、曾谷式、後期安行式、晩期安行式である。石器は広義の敲石、磨石類で、非常に貧弱な組成であった。土製珧状耳飾が1点出土した。</p> <p>縄文時代の集落は、早期後半茅山上層式期、前期前半黒浜式期及び前期後半浮島・興津式期の三時期に営まれた。茅山上層式期では、炉穴群と住居跡の関係が問題となったが、解明できなかった。なお、黒浜式期には、ロームブロックなどで敷設した道路状遺構が伴っていた。この遺構は、浮島・興津式期には、住居の構築と設営により破壊されていた。</p>
----	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

図版1



D1・D2完掘



D6完掘（近景）



D4A・D4B完掘



P29完掘（北東から）



D5完掘



P29完掘（西から）



D6完掘



P169完掘



P55 (炉穴) 完掘



P48完掘



P171 (炉穴) 完掘



P60完掘



P119 (陷穴) 完掘



P65完掘



P 4 完掘



P82完掘

図版3



P95完掘



P161完掘



P100完掘



P191完掘



P107完掘



3区ピット群



P150完掘



4区ピット群



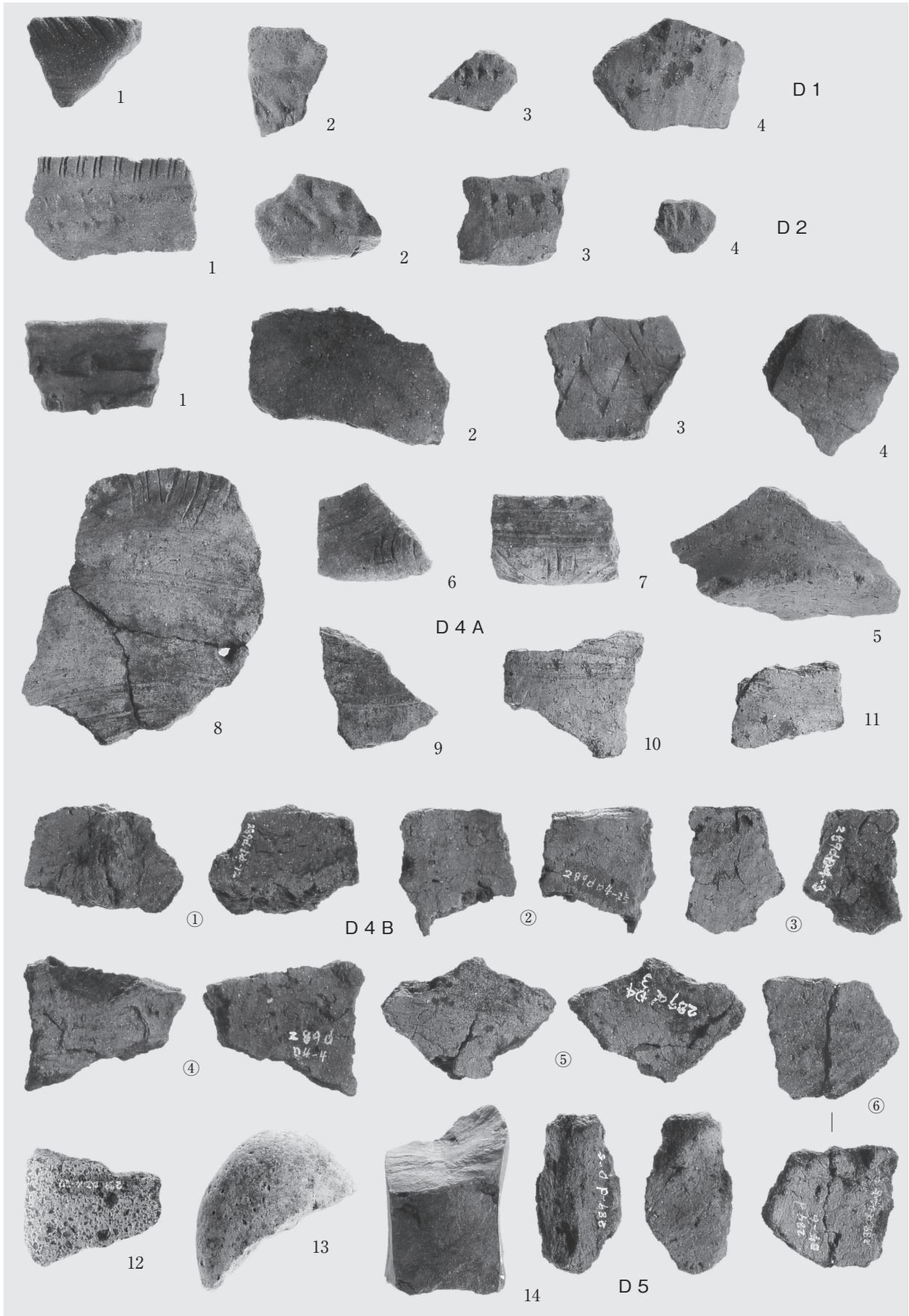
MM1 完掘 (南西から)



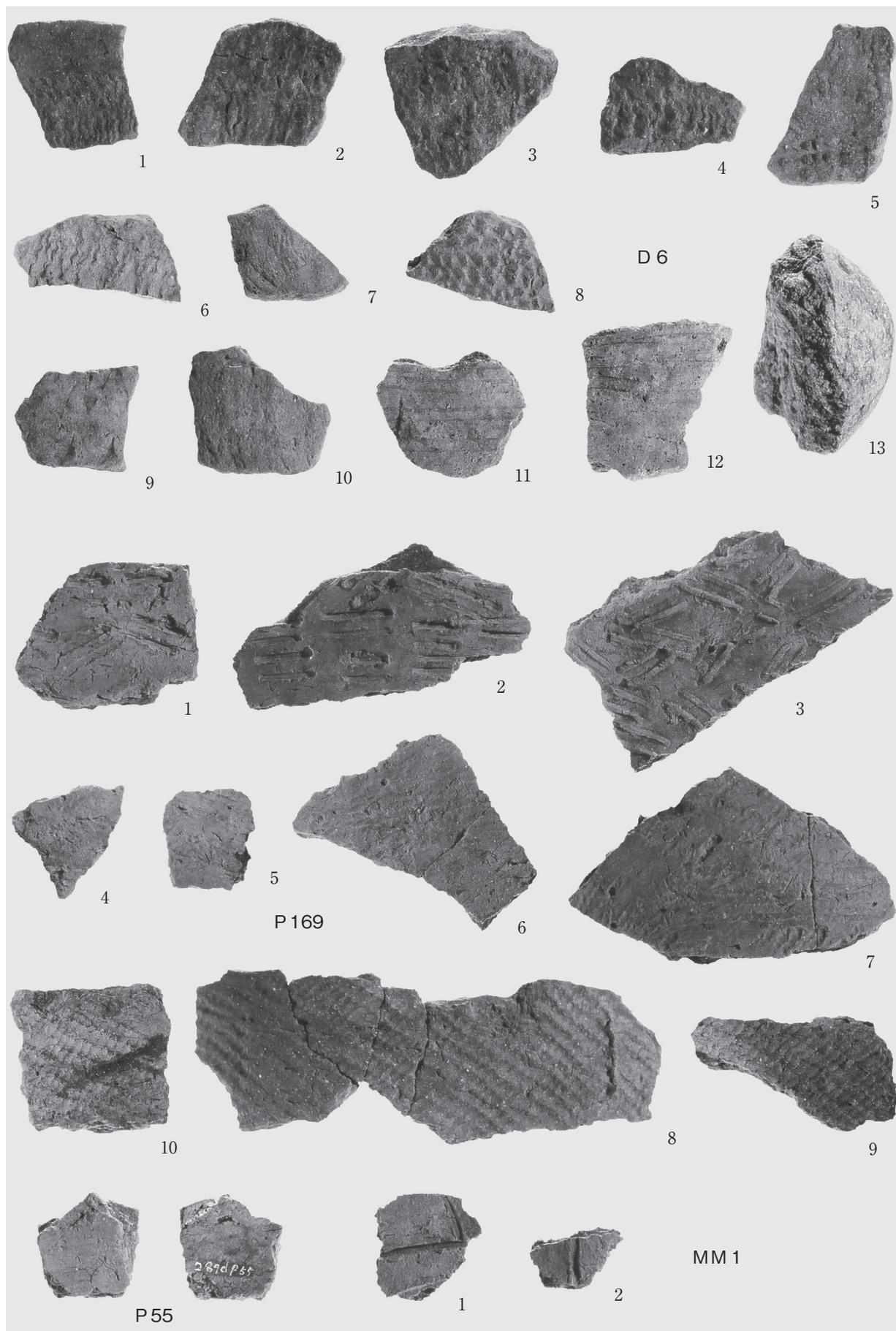
MM1 近景 (南東から)

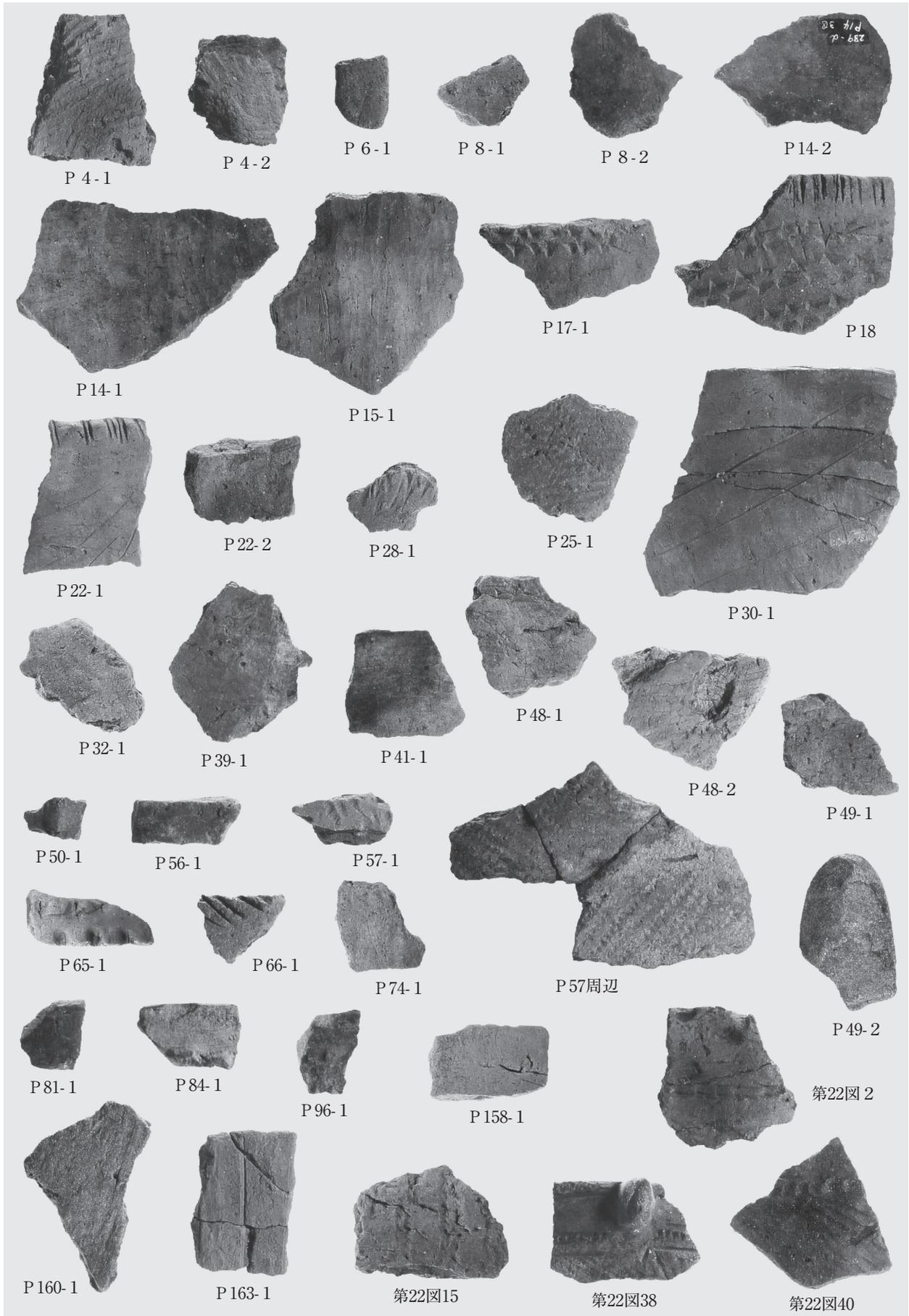
図版 5

住居跡出土遺物 (1)



住居跡出土遺物（2）、炉穴・道路状遺構





千葉県八千代市
内野南遺跡d地点発掘調査報告書
－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査－
2008（平成20年）

印刷日 2008年 3月24日

発行日 2008年 3月31日

編集 八千代市教育委員会

〒276-0045 八千代市大和田138-2

TEL 047-483-1151

発行 斎藤信孝

印刷 金子印刷企画

